
コードギアス～black knight of the fascination～

Joker2号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス\black knight of the falscination\

【Nコード】

N7522L

【作者名】

Joker2号

【あらすじ】

皇歴2010年日本はかねてより発生していたサクラダイトによる超大国ブリタニア帝国との経済摩擦から発展した戦争によって日本はブリタニア帝国に敗れた。

そして、日本は『日本』という名前と誇りを奪われ、ブリタニアの11番目の植民地というわかりやすい意味の『エリア11』という日本人には憎しみに満ちた名前になった。

そしてライのエリア11でのそして世界での戦いが始まる。

※オリジナルの主人公です

※作者は小説初心者で初投稿です、なので一部見にくいところもあると思うのでご容赦ください。

※LOST COLORSやナイトメア・オブ・ナナリーの設定など一部引用いたしました。

少しタグを変更しました。

プロローグ（前書き）

初投稿です。これからよろしくお願いします。

プロローグ

皇歴2010年日本はかねてより発生していたサクラダイトによる超大国ブリタニア帝国との経済摩擦から発展した戦争によって日本はブリタニア帝国に敗れた。

そして、日本は『日本』という名前と誇りを奪われ、ブリタニアの11番目の植民地というわかりやすい意味の『エリア11』という日本人には憎しみに満ちた名前になってしまった。

しかし、10年前皇歴がちょうど2000年の記念すべき年に話の始まりを迎えることになる。

この年、神聖ブリタニア帝国に2人の皇子が産まれたのだ。

いや、もしかしたら双子の皇子が産まれるそのずっと前から物語は始まっていたのかもしれない…。

生まれた双子の兄弟の兄をルーシュ・ヴィ・ブリタニア、弟をライオネル・ヴィ・ブリタニアと命名された。

だが、皇室の慣例上、2人の皇子は縁起が悪いとされていたために、弟は当時の皇室からの歴史そのものから抹消された。

そして、それを知る者も双子の父親の第98代ブリタニア皇帝シャルル・ジ・ブリタニアと母親の後妃マリアンヌなど皇室関係者を除くほぼすべてのものが排除、もしくは抹殺されてしまったのだった。

母マリアンヌは息子のライオネルを抱くことはできなかった。

そして弟のライオネルは偽りの両親のもとに預けられライとして6歳まで育てられたのだ。

だが、6歳になったある日ある研究施設に入ることになった、その研究施設で『力』を得た、そう『力』を……。

敵を完膚なきまでに倒すための王の力を……。

しかし、得たものも大きければ失ったものも大きかった。

そして2年という月日がたち。その研究所から出て送られた先はある軍関係施設だった。

そこでは、KMF（ナイトメアフレーム）のシミュレーションでの騎乗訓練、基本戦術、戦闘訓練、パラシュート降下、破壊工作、諜報活動などの訓練だった。

つまり、スパイ活動するための基本技術が2年間行われたのであった。

そして、初めて戦場の土を踏む瞬間にライ自身も知らないうちに末梢されし皇族という異色の経歴を持つ特殊工作戦闘員のちに『幻惑の黒騎士』と二つ名で呼ばれる者が誕生したのだった。

ライ10歳にしての最初のスパイの活動場所は偶然か、それとも運命か、血のつながった兄弟が人質として送られ、ライとルルーシ

ユ、足が不自由で目の見えない妹のナナリー・ヴィ・ブリタニアの母国ブリタニアとの戦争色が濃厚だった『日本』に関わるものだった。

この最初の活動で今後のすべてが決まってしまったのかもしれない。

しかし、まだこの事はライもルルーシュも誰もが知らなかった

のちにこの報告を受けたブリタニア皇帝は、

「これも偶然か、それとも運命か『全て』がエリア11に集まってしまった」と言っていた…。

プロローグ（後書き）

ご覧頂ありがとうございます。どうでしたでしょうか？
これからもよろしくお願いします。

2010／10／13 修正。

T a r g e t 1. (前書き)

1話です。

初原作キャラの登場です。

Target 1.

「ライ・J・フロリオ！君に組織に入るためのテスト兼初任務を言い渡す。軽い任務を用意しておいた、君なら突破できるだろう。がんばってくれたまえ。」

「…はい」

現在ライはブリタニアの帝都ペンドラゴン近郊にあるブリタニア皇帝直属秘密機関の「9（ナイン）」と呼ばれる組織の本部にて任務の説明を受けている。

「9」からお声がかかったのは、施設でのシミュレーションの成績が飛びぬけてよかったため、組織に入るための試験を受ける許可が出たのであった。

「9」のテストは基本的には実戦のミッションを遂行できて、なおかつ合流地点から定時までには回収できれば合格、時間が過ぎた場合や的に捕まり捕虜になった場合は即座に失格、存在、生命を奪われる、通常では考えられないほどにキツイ試験なのだ。

しかし逆に言えば【その位できない秘密工作員などいない】ということだ。

「まず今回の任務だが、始まりは、対象のナイトメア5騎を回収もしくは破壊だ。そして今回は対ナイトメア戦が予想されるためにブリタニア軍で第二皇子シュナイゼル殿下の肝煎りの特別教導派遣技術部で君専用のナイトメアを造ってもらう。まあ、失敗しないとわかっている君だからできることなのだがね。ナイトメアの完成後

予測ではタンカーが日本の領海ギリギリのはずだ、日本の領海に入る前に回収もしくは破壊してもらう。そして今回の君のコードネームは、Rだ。説明は以上だが、質問は！」

「2つ程よいでしょうか？、まず1つ目なぜ自分専用なのでしょう
か？」

「それに関しては、前のシミュレーションでの君の数値が異常だからだよ。君の数値は常軌を逸しているそのため、今の初期型のグラスゴーではすぐに機体がすぐに逝かれてしまう。向こうの士官も舌を巻いていたよ、何せ1対4のシミュレーションで7分台を出したのだからな。」

「わかりました。もう一つ、作戦終了後自分専用のナイトメアの処
理方法は？」

「それはまだ決定していない。何しろ今は1騎がかなり貴重だから
な。しかし「9」に入る前提での君専用機だからな。・・・まだ扱
いが決まってる！なので、作戦終了後追って通達する。『生きて
いたら』だけだな。まあ君なら楽勝だよ。」

「わかりました。」

「専用機製作のフィジカルテストなどがあるから、明日特派のほう
に向ってくれ。特派の場所は別紙の地図を見てくれ」

「イエス・マイロード」

「ここは軍じゃないんだ、そんな堅苦しい挨拶するな！組織の『中』
ではな。」

「了解。」

ブリーフィングが終了しライが出て行った。

「まったくもって硬い奴だ。だが己を崩さないだから信用できるというもんだ。」

そう言い残したあと「9」の今回の作戦の指揮担当もブリーフィングルームから出て行った。

次の日

この日ライは特派の前まで来ていた。

そして中に入ると

「こんにちわあ〜！君が「9」のライ・J・フロリオ君だねえ〜。君いい体してるねえ、うちのデヴァイサーにならない？」

「もおー、ロイドさん！何言っているんですか！「9」の担当者の人からは極秘って言われてたけど、この人おしゃべりだから。ごめんね、ライ君。この人いつもこうだから気にしないでね。」

「はあ…？」

正直このときライは特派の責任者ロイド伯爵とセシル女史の会話についていけてなかった。

ライの特派の印象は、『なんだここ』という部分が大きかった。

第二皇子のシュナイゼル殿下の肝煎りで有名な特派は職場の雰囲気
がフランクなのでも有名だが、ここまでフランクだとも思わず、ロ
イドやセシル以外の特派の面々も「また始まった。」や「おっ！や
っている、やってる。」などの言葉を吐きながらそれぞれの実験や
研究をセシル女史とロイド伯爵のやり取りをBGMかのように淡々
と進めていたからであった。

そしてセシル女史に怒られているロイド伯爵も「だってえ」や「
でもお」などと子供のような反応をしている。そこでライがボソ
ッと小声で「母親と駄々っ子？」と言ってしまった。

「私まだ母親なんて年じゃありません！」とセシル女史。

「でも、よく言われてるよね！セシルくん」とロイド伯爵。

「ロ・イ・ド・さ・ん！」

「まあいいや、じゃあフィジカルチェック始めるから。」

後ろで「よくありません！」とセシル女史が言っているようだがこ
の場合無視したほうがいいと判断し無視た。

「お願いします。えっと？」

「あごめんなさいね、まだ名前言ってなかったわね。私はセシル・
クルーミー、こっちが特派の責任者でロイド・アスプルンド伯爵！」

「伯爵だったんですか！申し訳ございません。ロイド伯爵」

「いいよお、ロイドで基本的に気にしないし関係ないから。」

「でも！」

「気にしないで、うちはこういう雰囲気だから。私も気軽にセシルさんって呼んでね。これから長く付き合うことなるだろうから。」

「どういことですか？」

「君の専用機のデータは特派がとることになったの。もちろんそちらの組織にも回すけどね。」

「まあこっちとしてはどうにかしてもデータは取るつもりだったけどね。たとえばデータにロックかけるとか。うふふー。そういえば、君はどうしてこの任務にKM Fが必要な任務か知ってるかい？」

「いいえ。」

「それはねえ、2週間前ある技術士官が逮捕されたことからなんだよねえ。罪状は『小破のナイトメアを大破と偽りある反政権勢力に横流しをしていた』こと、発覚し反政権勢力のアジトとされる場所に軍を向かわせたらしいんだけど、その時には他国船籍の貨物タンカーに搭載して日本に向けて出発し公海上に出た後だったんだ。そして、その後もうまく領海内に入ることなく日本に向かっているという情報が入っているらしいんだよね。もうすぐ日本と開戦という状況で日本軍に最新のナイトメアフレームが渡るといのは・・・」

「かなりまずいですね。」

「さすがにこのぐらいはわかるかあ。」

「それは、いいですから、始めましょう？ね！ロイドさん！じゃあまずこれからやりましょうか。」

「そうだねえ」

そして地獄のフィジカルテストは開始され、テスト項目は30種類行われ、しかも時間はなんと4時間という長い時間をほとんどぶっ続けで行われロイドは終始「んふふううう、面白いね」とか「ここがこんなに！」とか言っていたとかいなかったとか。

Target 1. (後書き)

ご覧頂ありがとうございます。

ご意見ご感想評価等まっています。

次は完成しだい投稿したと思います。

2010/10/13 修正。

Target 2. (前書き)

今回は過激で残酷な表現が含まれています。ご注意ください。

表現を変えたほう良いという感想があったら感想を見次第変更作業に移りたいと思います。

今回は作戦完了までです。

ではどうぞ。

Target 2.

そして今、特派と「9」技術部を総動員して作戦に使われる第4世代KMF「グラスゴー」と試作型の「ポートマン」の改造と最終調整が行われている。

機体のカラーは両方とも黒に塗り替えた。

何故かという、作戦決行は基本的に夜に決行になるので、保護色になるからである、後もうひとつ夜が明ける作戦失敗でそのため目標のために目立ち約1km離れた場所からのミサイル等の兵器で攻撃での一斉破壊をするためである。

今は、比較的改造が楽なグラスゴーはロイドからの指示書だけで「9」の技術者だけで行っているほど簡単だったが問題はポートマンのほうであったシミュレーションでの値をみると、ライの操縦テクだと動力部と関節部が戦闘になるとすぐにいかれてしまい、機能が停止どころか動力部が爆発してしまった。

もともとこの作戦はライがポートマンで接近して船を攻撃して動力を奪い敵が乗り込む前に回収するかそれが失敗した場合、あらかじめ用意しておいた島か船上で、ライ専用改造型グラスゴーで各機撃破するというのが作戦だ。

なぜグラスゴーに乗り換えるのかというと基本的にポートマンは水陸両用に設計されているが、陸上の場合極端に機動が遅くなるためである。

しかし、ポートマンの使用ができない場合作戦を変更せざるおえない

い。

なぜポートマンの使用かという点と海中での戦闘も想定されていたからだ。

敵の反政権組織は規模てきには大きいほうで潜水艦を所有しているとの情報があったからだった。

なのでポートマンを使えない今回の場合潜水艦が同行しないと想定すればポートマンは要らないわけでとても大きな賭けである。

なので作戦は変更され船の動力部であるスクリューに魚雷を打ち込み動力を停止させて、ライが上空からの降下で船に潜入しの船内での探索及び機体の回収、船内のクリアリングでの敵兵の確保か殺害を行う算段になった。

ここで変更後の作戦の危険な点

- ・魚雷打ち込みの失敗時の作戦実行。
 - ・初期クリアリング失敗時の敵勢KMF機動
 - ・もし敵兵を見逃してKMF回収ヘリが接近した場合の敵兵器によって打ち落とされてしまう可能性がでてきてしまう。
- 以上の3点が危険になってきてしまう。

そしてポートマンのない今なにが重要かと言うと、

- ・ライのクリアリングのスピード
 - ・そして精度
 - ・そしてどこぞの蛇さん張りの潜入時のステルス性
- 以上の3点に尽きてくる。

そして作戦は開始されライは敵船に上空から接近しパラシュート降

下している。

いったん敵船の中ごろに着水し今敵船後方の甲板に乗ったところだった。

そしてライはヘッドショットや、CQCからの首を折ったの殺害などの手段を使い船内をどんどんクリアリングをしていく。

そしてほとんどクリアリングができたころ、船後方での爆発音で味方からのスクリューに対しての攻撃が成功したことがわかった。

この攻撃でこの船が単独行動であることがわかった。

なぜなら潜水艦が護衛している場合即座に護衛行動なり防衛行動がとられるはずであるからである。

そして徐々に船の速度が徐々に落ちていった。

そしてけたたましいアラーム音とともにエマージェンシーコールがなった。

「現在6時方向から魚雷による攻撃を受けた、なお今現在敵勢工作員が侵入した形跡がある。各チームは警戒におよびKMFのパイロットは騎乗準備をせよ。」

そしてライは急ぎ仲間に自分専用のグラスゴー送ってもらうようはしりながらに連絡し甲板で投下のマーカーを設置し、こちらのKMFの投下準備を終わらせた後、敵勢KMFのパイロットの抹殺に動き出した。

パイロットが来るまでに防水処理をして持ってきた、C4を一番奥の機体の脚部の関節に設置した。

そこでKMFのパイロットが一人来た。

KMFのキーは一括して保管されているらしく少し遅い登場でそれからだんだんKMFに着きはじめた。

まずは1人目グラスゴーの始動をしているところを死角からサイレンサーつきのハンドガンでヘッドショットで1人。

そして2人目はコックピットに上がる直前でCQCで倒しナイフで頸動脈を一かきし殺害したところで後3人のKMFへの騎乗が許してしまった。

ちょうどよくライの専用機が降下されまもなくしてライが騎乗した。

そしてライの初の実戦での対KMF戦が開始された。

始動キーを挿してパスワードの入力を終えた時には3機のKMFが迫ってきていた、何とか間一髪で始動操作が終わりギリギリでかわす。

2機がトンファを使って左右から接近し、そして残りの1機がアサルトライフルを使って援護を開始していた。

しかしライは機体スレスレの所ですべてよけていくそして、アサルトライフルを手に取り近づいてくる右の機体に向かって一直線に近づき横を通り過ぎる直前に敵の攻撃をかわしつつアサルトライフルで敵の機体の腹部を撃ち通り過ぎた直後に急旋回し背後を取り、ト

ンファを起動させて目の前にいる敵を撃破した。

そして次に船にある設置したC4を爆破させ機動力を奪ったところで敵に近づきトンファで2機目を撃破したときに衝撃を受けた。

しかし次の瞬間後ろを見た時には3機目はコンテナの陰に隠れていた。

後ろからの攻撃であったためにランドスピナーを急速させて近くの隙間に入り改めて攻撃態勢を整えた。

まず、装備されていた試作中のケイオス爆雷を上空に向かって投げ爆雷の攻撃が終わった後にアサルトライフルを構えながらランドスピナーを使いコンテナの上に上がり敵を確認ししだい奇襲を敢行した。

そして敵に向かってスラッシュハーケンを撃ちだすがアサルトライフルの弾幕で落とされるが、しかしこちらもアサルトライフルで応戦し、敵の駆動系にダメージを与え回避行動を取り始めたので急いで背後に向かいトンファで止めを刺し戦闘を終了した。

そして戦闘終了を作戰担当者に通信で伝える。

「こちらR戦闘終了回収を頼む」

と通信を終了しふと、自分のKMFを見ると、急な機動のしすぎで脚部が限界だったらしい動かなくなる直前なのに気がついた。

「よく動いた相棒^{パートナー}」と言い労う様にポンと機体を触った。

T a r g e t 2. (後書き)

ご覧いただきありがとうございます。ご意見ご感想評価等まっております。

作中の用語説明

CQC…(Close Quarters Combat)、軍隊や警察において近距離での戦闘を指す言葉である。主に、個々の兵士が敵と接触、もしくは接触寸前の極めて近い距離に接近した状況を想定する。「Close」は「近い」を意味する言葉であるため、クロス・クォーターズ・コンバットと発音され、「閉じる」を意味する「クローズ」ではない。Wikimediaより出展ヘッドショット…(Head shot)文字道通り、頭への銃撃です。

T a r g e t 3. (前書き)

もしかしたらかなりggggかもしれません。

今回は作戦終了から原作キャラとの遭遇までです。それではどうぞ。

Target 3.

作戦は事実上は成功をした。だが1つ見落としていたところがあった。実はこの船上での戦闘時に一人の人物によってグラスゴアの設計データの基本データの一部が持ち出されていたのだった。

しかしそれを知るのはブリタニアと日本の戦争が終結した後だった。一方作戦終了した時暗い顔したものと明るい顔をしたもの両極端だった。

まず前者の暗い顔したものは「9」のこの作戦の会計担当のチーム、そして後者は前者以外の全員だった。

前者のものはkMFの修理費用がkMF1機作る費用の6／7とかかなりの高額だったからであった。

そして後者の人々はkMFを2機も無傷で確保できたと喜ぶものや「こおんな、いいデータが取れたのは久しぶりだよ」とご満悦のものと様々な人がいた。

一方ライはというとテストに合格したことをつげられ、本格的に組織で働けると思い改めて気持ちを入れなおしていた。

そしてその数日後ライの初めての任務地が決まった。

それが運命か宿命か先週に母親の後妃マリアンヌが身罷ってそして政治の為に第17皇位継承者のルーシュ・ヴィ・ブリタニアと第87位皇位継承者のナナリー・ヴィ・ブリタニアが送られた日本だ

った。

そして正式に日本への任務が組織内で発表されライの赴任後皇帝シヤルル・ジ・ブリタニアに報告されたのだった。

そして現在ライ達工作員はとある小国の外交官と偽り入国し現在、軍事関係施設への調査、民間の秘密兵器工場の場所、政治の内情、など多岐にわたり調査していた。

もともと日本は、第二次世界大戦後の高度経済成長や平和憲法の制定などで経済も比較的豊でそして平和憲法による戦闘行為などはない中立宣言で平和だったが、およそ数十年前それはとある地下資源の発見によって他国との関係が一遍するのだった。

その資源とは『サクラダイト』であるサクラダイトは超高温伝導体に欠かせない鉱物の一つで現在の技術では欠かすこと出来ない希少鉱物だった。それが富士山で大規模な鉱脈が発見されたのだった。

それから日本がサクラダイトの世界シェアの70%近く輸出するようになった。

また、1年に一度日本で日本主導のサクラダイトの配分会議が開かれそれぞれの国力に応じて配布されるようになり、それに端をはした各国は対日本戦の準備を秘密裏に進めている状況だった。

その1番の立役者がブリタニア帝国だった。

ブリタニアは各国に「日本はサクラダイトを武器に世界に進出する準備をしている」と嘘の情報を流しそのためか日本はどんどん孤立

していき結果軍事を増強せざるおえない状況になっていったのだった。

そのために皇帝直属の秘密組織「9」などの諜報機関は日本の戦力分析などに躍起になっていた。

事実「9」からもライを含めて短期間に日本への工作員スパイの派遣が主になっていった。

そしてライたち「9」は2つのチームに分かれていた1つが海兵力の多い九州沖縄に派遣されたチーム、そしてもう1つが航空戦力の多い北海道東北のチームだった。

首都東京や大阪、名古屋、などはほかの組織の管轄になっていた。

約3ヶ月後

そしてライは今、札幌でラーメンをすすっていた。

この3ヵ月で北海道東北の戦力を分析し、札幌で報告書の作成をしているところだった。そしてその締め切りが明日のためにこの3日寝ずに報告書を作成し先ほど極秘回線で送ったところだった。

先輩方はライに報告書を任せて本国に帰国していた。しかしライは一人だけ日本に残ることを命令され理由を聞いたところ「皇帝陛下の意向だ」としか返答されなかった。

1週間後

舞台は移り今ライは、とある場所にある枢木神社というところに来

ていた。ここは現首相枢木玄武の実家で息子の枢木スザクが暮らしているところであり、数週間前にルルーシュとナナリーが引越してきたところだった。

なぜここにいるかという、1週間前に上から「2週間ばかり日本の各地を回れ」と半ば休暇めいた謎の指令を受けたからだ。

そして指令所に「P・S・1週間後に〇〇県××市の枢木神社に行け」と書いてあったからだ。

少し考えていると遠くから自分と同じ年ぐらいの少年2人の声が聞こえてきた。

「おい！枢木の息子！ナナリーを、妹をどこへやった！」

「なんだ！いきなりいちやもんつけてきやがって！ナナリー？知らねえよ！俺はやるときは正々堂々正面からやる。卑怯なことはしない。」

「ならいい。邪魔した」

「おい！ナナリーがどうしたんだよ？」

「お前には関係ない」

ひとりが枢木スザクだということがわかったがもう一人の少年が誰かわからなかった。

そして今の会話でヒントを探して考えているとある『名前』に引っかけた。

「ナナリー？妹？」

そして少ししてからこの指令が下ったわけがわかったのであった。

そう今の声は「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアと枢木スザクの会話だった。

そんなことを考えてると、枢木スザクが出て行った。

今の会話を聞くにナナリーがいなくなったようだった。

「それじゃあ僕も探そうかな」と言い探し始めて3分後遠くから「ナナリー！」という先ほどの少年枢木スザクの声がした。

声のほうに行ってみるとちょうどルルーシュが来たところだった。

「ナナリー！枢木！今助ける」

そこでライはたまたま持っていた縄の端を木にくくりつけてルルーシュのほうに投げて、急いでその場を後にしたのだった。

T a r g e t 3. (後書き)

ご覧いただきありがとうございます。

その他ご意見ご感想評価等随時受付中でございます。

O u t o f t a r g e t 0 1. (前書き)

P Vアクセス1486

ユニークアクセス351人

までいきましたこれも見てくださる皆さんのおかげです。

今回はルーシユ目線でのマリアンヌの殺された後からT a r g e t 3. の最後までの話です。

それではどうぞ。

Out of target 01.

「皇帝陛下、母が身罷りました。」

「それが、どうした」

「妹のナナリーも足を怪我しましたなんで見舞いにも来て下さらないんですか。」

「お前は、そんなことのためにお前は皇帝に謁見を求めたのか！」

「そんなこと！。あなたは父親ですよね？」

「弱き者には、興味はない。しかし弱き者にも使い道はある。」

その言葉を聞いてから、数か月、俺は今日日本のあるところにある榎木神社の「クラ」と呼ばれる、日本の伝統的な土でできた倉庫に住んでいる。電気もほとんどつかなく夜になるととても暗い。

家事全般は数か月前まで全くやったことがなかったが、この状況になって一人でナナリーを育てていかなくはいかなくなり、料理はまだまだだが、洗濯、掃除などはうまくなったといえるだろう。

「ナナリー、今帰ったよ。」

「ナナリー？ ナナリー！」

おかしい、いつもなら「お帰りなさい、お兄様。」と来るんだが？

今の家を探すけどどこにもいない。

「外か！」

そう思い枢木神社の敷地内を探し始めるが、見つからない。

考えていた時一人の少年を思い出した。

いつも俺達兄妹をブリタニア人だからといってちよくちよくと、家に来る現首相枢木玄武の一人息子枢木スザクのことだ。

「あいつ！」

そう思い枢木神社の敷地内にある枢木の本邸に向かって走り出した。

「おい！枢木の息子！ナナリーを、妹をどこへやった！」

「なんだ！いきなりいちゃもんつけてきやがって！ナナリー？知らねえよ！俺はやるときは正々堂々正面からやる。卑怯なことはしない。」

「ならいい。邪魔した」

「おい！ナナリーがどうしたんだよ？」

「お前には関係ない」

何！？こいつじゃないだと！

くそ！じゃあどこいったんだ！

「ナナリー！ナナリー！」

柩木の本邸を出て少したった後に柩木の息子の声で「ナナリー！」という声が聞こえた。

急いで駆けつけると不思議な穴が開いていた。

穴をのぞくと水の中で浮いているナナリーと柩木の息子が浮いていた。

急いで縄を取りにいかうとすると。後ろの茂みから縄が投げられた。

投げられた方向を見ると一瞬だが銀髪の少年が走っていくところが見えた。

投げた人物を知りたかったが今はナナリーを助けるのが先だ。

そしてその縄はよく見ると木にしっかり結び付けられていた、それを投げ入れナナリーと柩木の息子を助け出した。

助け出した後縄の結び目を見ると軍人特有の結び目をしていた。

どこの軍のものかは、わからないが確かにいえることは、俺達兄妹が柩木の息子が監視されている可能性があるということだ。

しかし今はナナリーが助かってホッとしていた。

これをきっかけに柩木の・・・じゃなくてスザクと仲がよくなっていった。

O u t o f t a r g e t 0 1. (後書き)

どうでしたでしょうか？

次も出来次第投稿したいと思います。

Target 4. (前書き)

今回は『力』が出てきます。

P V 1, 9 2 6 アクセス

ユニーク 4 3 3 人

突破です。

見てくださる皆様ありがとうございます。

Target 4.

そして時が来た皇暦2010年8月10日、世界唯一の超大国神聖ブリタニア帝国が日本に宣戦布告したのだった。

ここでライやライを取り巻く人物、そしてエリア11、はたまた今後の世界の行く末が決まった瞬間でもあった。

この戦争においてブリタニアは公式の戦闘で初めてKMFを公式で初めて実践投入され悪い意味で今後の兵器の歴史に載った瞬間だった。

もちろん日本軍が軍備の拡張がされておいたとはいえ、KMFに勝る兵器がない以上いくら戦闘機、戦車、装甲車などが有ったとしてもKMFに勝てるわけもなく日本は負けていった。

しかし実際ブリタニアとの物量さで負けたといってもいいだろう。

世界唯一の超大国と極東の中立国では図りきれないほどの物量さだった。

そしてその戦闘の中二人の姉弟が離れ離れになってしまい、姉は身体能力高さにとある秘密組織に入り、弟は泣いているところにある兄妹に保護されていた。

そのころライは、日本の各地にある兵器工場、軍事基地、の破壊工作任務についていた、任務は基本的には一人だが今回の任務はかなり困難なために、一人の補佐役がいたそれがかのテストに入るとき
のブリーフィングの担当だった、グレゴリオ・P・クーガーだった。

一週間前

「久しぶりだなライ！」

「あなたは！」

「おお！覚えてて「誰でしたっけ？」くれる分けないか」

「うそですよ、すみません」

「まあいい、またよろしくライ君」

「よろしくお願いします。えっと？名前なんでしたっけ？」

「言ってなかったか？」

「はい、聞いてませんね。」

「それでは改めて、今回、君の補佐役で来たグレゴリオ・P・クーガーだ。」

「よろしくお願いしますMr. クーガー」

「だ・か・ら！硬くなるな！って言ったはずだぞ」

「わかりました。」

「早速だが、今回の任務は、兵器工場、軍事施設、を破壊してもらう。」

「方法は？」

「施設ごとの爆破、機械だけでも何でもいい、ただし敵に悟られたりしてはいけない、それだけだ」

「わかりました。」

「最初の目標は東京湾沿岸の千葉県にある工場のひとつだ。」

「わかりました、目標に急行し作戦を遂行します」

そして千葉にあるJFEスチール東日本製鉄所近く千葉発電所に程近い場所に一般の工場と混じって兵器工場が秘密裏に建設されていたのだった。

mission

1, 兵器工場またはその製造用の機械の爆破。

2, 近くのJFE スチール東日本製鉄所、千葉発電所、等の施設への被害は認められない。

3, ステルスマッションのため爆破まで誰にも気づかれるな。

以上の条件でミッションをクリアせよということだった。

順調に潜入していたが、ちょうどC4爆弾を仕掛けていたときだった。

「だれた！」

「くそ！見つかった。」

「H、Q、敵の進入を確認、なお爆発物を仕掛け」

そのとき後ろから銃声が聞こえ通信していた兵士が倒れ、CCCで敵を倒しているグレゴリオの姿が見えた。

「P！」

「J！早くC4を起動させろ！」

「……………OK起動完了リミット3min」

「OKリミット3min、退避する。」

「建物への設置はすべて完了！そちらの爆発から2min」

「OK！」

「いたぞ！」

「くそ！見つけた！」

「逃げるぞ」

「2 or 10」

「2！」

「OK！P！」

「point 2A リミット2h」

「OK」

この短い会話で合流地点、逃げる方向などを決めそれぞれ逃げた、そして建物を出ようとしたときに、生産ラインのほうから爆発音が聞こえたそれを確認したときに、足を銃で打たれた。

「くそ、足が動かない！あの力を使わないといけないか！」

「もう逃げられないぞ！」

「ライが命じる！貴様らは死ね！」

ライは初めて研究所でつけられた力を初めて使った。

その後、ルルーシュによって『ギアス』と呼ばれる『力』を・・・

「承知！」

この言葉とともにその場にいたすべての敵兵がすべて自分の頭を銃で打ち抜き死んだのだった。

それと同時に工場全体から火がでて工場が崩れ去ったのだった。

そしてこの後、急いで合流地点にギリギリで着いた。

「おっ！きたなライギリギリだぞ」

「ちょっとゆっくりしてまして」

「! 足、大丈夫か!」

「問題ありません」

「なら良いが」

そしてライたちは千葉での任務を終えその後東京、川崎、横須賀、大阪、神戸、広島、北九州、長崎、などを回り作戦を遂行していった。

しかし鹿児島での任務の直前に突然帰還命令が最上位命令として下った。

不思議に思ったライとグレゴリオだったが、急いで本国に帰還したのだった。

T a r g e t 4. (後書き)

ご覧いただきありがとうございます。

次回の更新も出来次第投稿したいと思います。

T a r g e t 5. (前書き)

今回は多分短いです。

Target 5.

「緊急帰還命令ってなんですかね」

「俺も解らないが、一つ噂で・・・組織のメンバーほぼ全員がに帰還命令が下っているらしい。」

「関係あるかわからないが、他の組織の連中に聞いた話しだがなんでも日本軍の大規模なKMFの工場が発見されたらしい」

「もしかしてそれって!？」

「ああ、もしかしてあの時設計データが別にあつたのかもしれない。」

「もし『俺』のせいだったらどうなります?」

「もし『俺達』の責任だったらよくてあの任務をテストにしようと言い出した上の責任になり上層部の総入れ替え、最悪組織が解体される」

「解体!？」

「ああ、解体だ!」

「僕のせいで解体!？」

「お前の所為じゃない! だから気を落とすな! しかもまだ解体と決まったわけじゃない。」

「でも！」

「それ以上言うな！俺だって・・・」

そう言うのと本国の空港に着くまでしんみりとした空気が流れていた。そうこうしているうちに空港に到着そこにはちょうどEU方面に派遣されていたチームが帰還したところだった。

「久しぶり。」

「あっ、お久しぶりです。」

「どうしたライ。歩きながら聞かせてくれ」

「エリア11の秘密工場でグラスゴーモドキが発見されたらしくて」とクーガーが説明する。

「そのことか・・・」

「組織に入るときのテストで僕がミスしたから。」

「あの時か・・・そしたら組織すべての責任になる・・・」

「えっ！どういうことですか？」

「実は君の任務のほかにもうひとつあの場での任務が遂行されていたんだ。」

「もう一つですか？」

「そうだ！あの戦闘中少しだが、人が飛び込む音とエンジン音が聞こえたんだ。」

「それって！」

「あの時はデータを取ってるなんて思わないからな。今思えば戦闘以外はザルな作戦だったな。当事の作戦立案者に提案で海上に何人かの作業員をとという提案したんだが全て責任者が却下したんだ。そこで食い下がらないでおけば・・・くそ！」

「ああ、そういうことだから気にするなライ・・・」

「はい・・・」

そんな話をしながら30分位車で走っているうちに組織の本部に到着した。

そして、建物の中に入り大会議場に入るとエリア10、中華連邦などいろいろなところに派遣されていたチームがそこはいた。

10分位たったころ最後のチームと「9」の最高責任者が入ってきた。

「皆長期の任務ご苦労だった。もう皆も知っているだろう。がある作戦の責任者の判断ミスがあることが発覚した。決して作業員の責任ではない。作戦の前に作業員を増やせとの申し出が出たが責任者が却下した。そのためNMFの設計データが流出したらしい、その

ため「9」は解散、解体になる。」

それを聴いた瞬間「えっ！」や「やっぱり。」などの声が聞こえた。

「そのため、各員はいろいろな組織に吸収となる。」

そして皆に紙が配られたがらいのチームと見習いのナンバーズらしき女性には紙が配られなかった。

それを疑問に思っていると最高責任者から

「ライとクーガーそしてジュンはこれが終わったら私の部屋にきてくれ」

「「「わかりました。」」」

そしてその後その他もろもろの説明が1時間ぐらい続きそれが終わった後ライ、クーガーそしてジュンと呼ばれた少女は最高責任者の部屋に行った。

そこでいわれたのは、

「君たちには新しくチームを組んでもらう。」

「「「えっ！」」」

「どういことですか？」

「聞くな私も知らん。」

「知らないって」

「私は本当に知らない、皇帝陛下からの指示だ。」

「皇帝陛下!?!」

「そう、皇帝陛下だ。」

「そうですか。」

「そうだ明日お前たちは皇帝陛下との謁見があるから正装を用意しておけ。」

「「謁見ですか。何でいきなり!」」

「これも私はわからない!これも皇帝陛下からだ!」

「はあ?」

「だから明日はちゃんと行くんだぞ」

「「わ、わかりました。」」

Target 5. (後書き)

どうでしたでしょうか？

昨日は電王のエピソードブルーを見に行って上げられませんでした。
すいません。

この作品へのご意見感想評価お待ちしております。
よろしく願います。

T a r g e t 6. (前書き)

今回は短いです。

それではどうぞご覧ください。

Target 6.

「皇帝陛下って・・・」

「クーガーさんは会ったことありますか？」

「あるわけないだろ！皇帝陛下だぞ！」

「明日、正装って何着ていけばいいんでしょうか？それより私日本人なのに皇帝陛下にあってもいいんでしょうか？」

「ブリタニアノ正装でいいんじゃないか？って、皇帝陛下のことが印象強すぎて「顔がですか？」そうあの顔はインパクトが・・・じゃねえええええ、謁見のことだよ！それと新チームのこと！」

「そういえば自己紹介がまだでしたね、私アキカワ・ジュンています。ブリタニア風に言うとジュン・アキカワです。よろしくおねがいします。」

「ようこそ！チームライに」

「これからよろしくってクーガーさんチームライってなんすか？」

「言ってなかったっけ？このチームの名前だよ」

「そうなんですか、へえー・・・ってチームライってもしかしてリーダーは？」

「もちろんライお・ま・えだYO！」

「何ですかそのあ・な・たみたいなノリの後にラップモドキは、しかもたぶんこの中で1番年下ですよ!？」

「でもたぶん1番実力あるぞ。ほらブリタニアは実力主義だよライ隊長!」

「わかりました。」

「まあこれも上からの命令だけどな、はっはっはっはー!」

「まあいいです。それより始めまして、ジュンさん僕はライ・J・フロリオといいます。気軽にライと呼んでください。これからよろしく願います。」

「よろしく願います!ライ隊長!クーガー副隊長!」

「おっ!元気だな嬢ちゃん!こっちこそよろしく!と、挨拶が済んだところでお二人さんは正装は持ってるか?」

「「持ってません」」

「じゃあ買いに行くか!」

「でもお金が・・・」

「そんなこともあろうかと・・・」

といいながら服のポケットを探り始めたクーガーは「あれ?ここに入れたんだが」などといっている。

「あったあった！シャキーン」

といいながらポケットから小切手二枚を抜き出した。

「どうしたんですか？そのお金？」

「指令にもらった。」

「それで指令はあんな涙目だったんですか。それでどうするんですか？」

「お前たちの正装の服買うんだよ。ほら行くぞ！」

「わかりましたよ。」

「それじゃ、レッツ　ゴー！」

そういうと3人は車に乗り帝都方面に向かっていった。

謁見の日

「やっぱり緊張しますね。」

「緊張してるときは漢字の人って書いて飲み込むといいんですよ」

なぜか一人落ち着いているジュンに、人と書いて飲み込むと緊張しないと聞き以上に書いて異常な行動に見えるぐらいやっているクーガーに、戦闘前のような心境のライとなんと変な3人だった。

「どうぞ、ライ様、グーガー様、ジュン様こちらの部屋でお待ちください。」

「非公式だとこの部屋なんだな。」

「いやたぶん控え室だと思いますよ。」

「どう考えても、こんな普通の応接室並み部屋でやるわけないじゃないですか。」

「確かに……」

「準備ができましたのでこちらの謁見の間にお越しく下さい」

そして指定の場所に案内押され順番にジュン、ライ、クーガーでライが中心の形で膝をつき少しすると、

「皇帝陛下の御入室です。低頭をしてお迎えください。」

そう言われると、その場にいる全ての人が低頭し2秒ぐらい静寂の後『ギイー』という大きな扉が開いた音の後に『カツ、カツ』という足音がし、その後に「御直りください」といわれ直ると、そこには第98代ブリタニア皇帝のシャルル・ジ・ブリタニアが堂々と百獣の王かのごとく貫禄で立っていた。

「そちらが、ライオ・・・ライ・J・フロリオ、とグレゴリオ・P・クーガーとジュン・アキカワだな？」

「はい、皇帝陛下、まずこの程の、KMFのことは申し訳ございませんでした。」

「あのことは、報告によると約4ヶ月前の軍の失態が原因と聞いた、お前は「9」のテストとして実行ししかもデータのこと知らないと聞いた悔やむな悔やんでるぐらいだったら進め！」

「イエス・ユア・マジエスティ」

「それでこれからのことだが、お前たちには軍の機密情報局に入ってもらおう。しかし、ライとジュンは年齢が15歳になってから軍に入ってもらおう。それかこのままこのチームで工作作業を私の直属で行くかしかしそうするならこれまで異常にきつく汚い仕事をブリタニアのためにしてもらおう。さあ、リーダーであるライが今選択しろ！」

「今でありますか!？」

「即決できないものに興味はない」

「決めました、僕たちは……」

T a r g e t 6. (後書き)

どうでしたでしょうか？

次回も出来次第投稿します。

ご意見ご感想評価等よろしく願います。

H i s t o r y t a r g e t 0 1 . (前書き)

過去の話です。

それではどうぞご覧ください。

History target 01.

「おめでとうございます、マリアンヌ様元氣な男の御子さまを御懷妊でございます。」

「！先生まだお子さまがいるようです！しかもまた男の御子さまです！」

「何！呪われの双子皇子だと！急いで皇帝陛下にご報告だ！」

「ほんとに双子なのですね？」

「はい、マリアンヌ様」

「そうですか……」

だだだだ

「マリアンヌ！」

「陛下！」

「皇帝陛下、御側路いただき、恐縮にございます。」

「前置きはよい、でどうなのだ？」

「はい、間違いなく双子の皇子様にございます。」

「で、なぜ双子皇子はいけない？」

「公式の記録100年前の時は我がブリタニア帝国が崩壊寸前までの騒動で国民が1万人以上亡くなったとの記録があります。あと非公式ですがほかにも双子皇子だと災い起きています。」

「そうか・・・」

「陛下・・・」

「マリアンヌ・・・」

「陛下、片方を養子に出しましょう。」

「！良いのか？マリアンヌ」

「はい、ブリタニアのためです。」

「そうか・・・わかった、生まれたら弟のほうを養子に出せ。」

「かしこまりました、陛下」

「すまぬな、マリアンヌ」

「これからのブリタニアのためです。」

約10ヵ月後

「陛下！マリアンヌ様に陣痛が！」

「生まれるか！随時報告せよ！」

「イエス・ユア・マジェスティ」

そういうと兵士は急いで下がっていった。

双子の皇子だとわかって早10ヶ月いまだにあの時の決断を悩んでいたがもうそこで全てはブリタニアのためと踏ん切りをつけ一時謁見を中断してマリアンヌのいるアリエス宮まで急いだ。

アリエスまで行くまでにマリアンヌとのことを思い出していた。

マリアンヌは元々ブリタニア軍の騎士候だった。

要するに元は一般人でそこから帝国最強の12騎士『ナイトオブラウンズ』に登用された。

そして、数年前のナイトオブワンの反乱事件をきっかけに后妃になった。

そのようなことを考えているとアリエス宮についていたそうすると中から小さく「オギヤー」という声が聞こえた。

「生まれたか・・・、一人目か？」

「そうであります、皇帝陛下。」

「部屋はどこだ！向かうぞ！」

部屋の前に着いたとき2回目の「オギヤー」という声かした。

部屋に入ると黒い紙が少し生えている赤ん坊と銀髪が少し生えている赤ん坊がいた。

銀髪のほうの赤ん坊が生まれたてとわかる。銀髪の赤ん坊を持っている医者に目配せをして銀髪の赤ん坊を運び出させた。

「よくやったな、マリアンヌ」

「陛下来てらしたのですか。」

「気になってな・・・ほんとに良かったのか？」

「陛下は今ブリタニアのことだけを考えて下さい！」

「わかった！戻るぞ！」

「」「イエス・ユア・マジエステイ」「」

このとき皇帝シャルルの心は決まっていた双子の弟のライオネルのことを忘れることを約十年後また会うことも知らずに・・・。

H i s t o r y t a r g e t 0 1 . (後書き)

どうでしたでしょうか？

ご意見ご感想評価等よろしく願います。

次回も出来次第投稿したいと思います。

O u t o f t a r g e t 0 2 . (前書き)

お待たせしました。

腰痛でできませんでした。

申し訳ございません。そして短いです。
それではどうぞ。

Out of target 02.

In 広島県厳島

「藤堂中佐、四国の防衛線ががた落ちです。」

「そうか……。わかった呉の基地が機能不能な今この厳島が次の戦場になるぞ！戦いの準備をしておけ。」

「了解しました。」

「少将閣下、軍司令部に増援の要請を！」

「わかった、すぐに増援要請を出しておく。」

「ありがとうございます。」

そういうと四国戦線の状況を報告した下士官とともに少将の部屋を出て行った。

「しかし戦況が良くないな……」

「そうですね。しかし噂によると、軍の諜報部がブリタニアの新兵器の設計データを入手したという話ですし。それで、京都の研究機関で解析が完了し次第生産体制に入るそうですよ。」

「本当か！それが生産されれば戦況も変わるぞ！」

「そうですね！それでは私はここで失礼いたします。」

そう言って敬礼すると下士官は担当の場所へ戻っていった。

「よし！心気一転鍛練だ！」

In 京都

「孝助さん、純と刀真元気かしら？」

「あの子達のことだ、大丈夫だ。」

ドタドタドタ・・・・・・・・ガタン

子供のことを話していると、急いだように男が入ってきた。

「秋川博士！純ちゃんがブリタニア軍との戦闘で行方不明！刀真くんも逃げる途中で怪我したそうです！」

「「！！えっ・・・・・・・・」」

「純ちゃんのことはずでに警察に届けを出し、刀真君のほうはすでに病院で治療中です。」

「わかった。・・・刀真は治療が終わったら、京都のほうに来るよ
うに言ってくれるか？」

「了解しました。」

「純のほうは待つしかないな・・・・・・・・純・・・」

「純ちゃん・・・」

「大丈夫だ！美弥子、純は強い子だ！」

「はい！」

「それでは自分は失礼いたします。何かありましたらまたご連絡いたします。」

「ありがとう。」

そう言う男は出て行った。

「そうしたら、今はKMFの研究に専念するんだ！」

「はい！日本製のKMF製造のために！」

「まずは手に入れたデータの解析は？」

「終わってるわ。」

「わかった、こっちはサクラダイトの研究を進める。」

「わかったわ、こっちはグラスゴーの設計データを元に各部の強化をやってみる。」

「そうだ、これからはNMFではなく人型自在戦闘機と言いグラスゴーもこれからは無頼というらしい。」

「敵勢言語の排除ってやつね。」

「ああ・・・。そんな事言っても研究する場合はそんなこと言ってもらえないな」

「そうね・・・。」

「それじゃあやろうか。」

「わかった。後で病院聞いて刀真に電話しましょ。」

「そうだな・・・。」

そういうと会話が終わり二人とも自身の研究に没頭していった。

O u t o f t a r g e t 0 2 . **(後書き)**

どうでしたでしょうか？

ご意見ご感想評価お待ちしております。

次話は出来次第投稿します。

T a r g e t 7. (前書き)

一応本編(?)更新です。
それでは、どうぞ。

Target 7.

「よかったですか、あの選択で？」

「ああ、いいんですよ、あなた方をこれ以上巻き込むわけにはいきませんか・・・」

「わかったよライ、これから、別行動になるな・・・」

「元気でいてくださいクーガーさん、ジュンさん」

「元気でな、ライ」

「隊長と任務できなくて残念ですが、また・・・」

さかのぼること数十分前・・・

「即決できないものに興味はない」

「決めました、僕たちは・・・、いや僕は一人でスパイを続けます。」

「「えっ!!!」」

「いいのか？」

「はい！ですが皇帝陛下一つだけお願いしてもよろしいでしょうか」

「？」

「ほお、ブリタニアの、一国の王に対して願いとな、なんだ言ってみろ！」

「ありがとうございます、皇帝陛下！クーガーさんとジュンさんもできれば他の組織に入れてスパイを続けさせていただきたいんです。」

「言われずともそのつもりだ！」

「ありがとうございます！」

「以上だ！クーガーとアキカワはさがれ！」

「「イエス・ユア・マジエステイ」」

そういうとクーガーとジュンは謁見の間から出て行った。

「さて、ライよ、ほかに言うことがあるのではないか？」

「！！なっ！わかりました。」

そしてライはすべて話した、千葉で使った能力の事、枢木神社でのことなどすべてを・

「ほお、貴様の能力は絶対遵守か・・・」

「はい」

「これからは、私の直属でやってもらおうぞ！いいな！」

「はい！皇帝陛下！」

「さしては、今回はEUの動向を探ってきてくれ」

「イエス・ユア・マジェスティ」

そして現在・・・

「それじゃあ、お2人ともお元気で！」

「「それじゃあまたどこかで会おうぜ（会いましょう）」」

そしてクーガーとジュンは次の組織が通知されたためそちらの組織へ、ライは次の任務の地EUへと向かうために空港に向かった。

「はぁ、ライ行っちゃったな・・・」

「そうですね・・・」

「さて次の任務に向けて、ジュンの特訓だな！」

「え！マジですか？」

「マジだ、君は身体能力が高いとしてもまだ見習いだからな！」

「わかりました。なんでもやってやりますよ!」

「おし!その意気だ、まず体力増強と銃火器の取り扱いだ!」

「はい!」

「よし!がんばるぞ!」

「オー!!」

と、のりのりで400mトラック30周の後100m10本そしてハンドガンの射撃訓練と続いていた・・・。

日が暮れたころ・・・

「よしこんなもんだろ」

「ありがとうございます!クーガー隊長!」

「おう!明日は9..00に集合だ!」

「はい!」

と次の任務が決まるまで特訓は続いたという・・・。

T a r g e t 7. (後書き)

どうでしたでしょうか？

ご意見感想評価等おまちしております。

T a r g e t 8. (前書き)

今回はライは出てきませんが、結構重要な会かもしれないです。
それではどうぞ。

Target 8.

ライが去って3ヶ月。

クーガーとジュンは再び日本の九州戦線に来ていた。

正規軍の主戦力部隊がくる前の破壊工作が今の彼らの任務だった。

そしていまジュンが北九州の工業地帯の破壊工作を終わったところだった。

「こちらJ、ポイント2Aから4A及びポイント5Gから7Gまでの準備完了」

「了解！ それではこちらまで誘導する。 ある程度離れたら爆破しろ。」

「了解！」

「今から起爆します。」

「了解！ 爆破しろ」

「了解、3・2・1・爆破」

ドゴーーーーー

「OK！ ミッション終了だ。」

「合流地点に到着。」

「OK、迎えの到着まであと5min。?! 敵が接近中。J
! 3時の方向だ」

「えっ!？」

「いたぞ! 敵の工作員と思われる人物を確認! 本部増援を頼む」

「こちら本部了解! 増援を送る」

「まずい! K 敵の増援が来ます。」

「今の装備は!」

「コンバットナイフが1本とハンドガンが1丁、弾は13発です。」

In 移動車両

「わかった! まず建物陰に隠れながら市街地方面に逃げろ! お前から見て8時方向だ! だが下手しても10時方向の八幡製鉄所方面には行くな! あっちは今さっき第二種警戒態勢に入った!」

「わかりました。」

「周りの建物を警戒しながら進め! あと使えるものがあつたら何でも使えよ! よしOK、今お前の端末に変更後の合流地点を送った。」

「了解! ありがとうございます。」

「そうだ思いだした！その近くにバイクを使用している部隊の基地があったはずだ！……そこに向かってくれ！……そうだその先を左にまがったところだ！……いったん基地の中に入れ。そしたらまずどこでもいいから通信用の基盤を探して、予備端末をそこに差し込め！……できたか！よしここで俺の秘密スキルその1だ！」

そう言うとき、クーガーは敵の基地にハッキングを始めた。

「……大丈夫だ、敵はさっき爆破した建物の方に向かった。……そこにあるライダースーツに着替えろ。……ちよつと待てよ……よし出た！更衣室は1階の奥だライダースーツは多分男ものだけだ、あっ！お前、胸が無いから、あっ！通信切りやがった………お前いきなり通信切るな！で、着替え終わったか？……OK！そしたら整備室に予備のバイクがあるはずだ、そこに行け！………！まずいもうすぐ部隊が帰ってくるぞ急げ！」

In 敵部隊基地

「「帰ってくるぞ急げ！」」

「わかりました。」

そして急いで整備室に行った。

「「ついたか？」」

「はい今つきました。予備のバイクを発見しました。」

「「そしたら近くに鍵とシャッターを開ける装置があるはずだ探せ」」

「シャッターは今開けました、鍵はついてます。」

「「よし、今予備端末を始末した。そしたら端末の示すポイントまで行け。」」

「わかりました。」

そしてバイクでその基地を出た。

「「ポイントの近くになったら一旦スピードを緩めろ！」」

「何ですか？」

「「壁をぶち壊す！」」

「は?!」

「「は? じゃなくて緩めろよじゃないと巻き込まれるぞ、いいな！」」

「わ、わかりました。」

少し走ると後ろから撃ってきた。

どうやら先ほどの基地の部隊のようだった。

ダダダダダダ!

「P! どうしたら良いですか!」

「「わかったこっちで誘導するからそのとおり行け！」」

「わかりました。」

「「良いか！次を左つぎを・・・・・・・・・・」」

「ありがとうございます。」

「「良いってことよ。よし近づいたなスピードを落とせ。」」

「わかりました」

そしてポイントが近づくと110 km/h出しているを、80 km/hまで下げたら、

ドゴーーーーーン

約500 m先の壁が破壊された。

そこに待機していた移動車を確認し、バイクを止めて合流した。

「よし出せ！」

「クーガーさんありがとうございます」

「おう。！？ちょっと待て・・・・・・・・何！」

「どうしたんですか？」

「日本の現首相の枢木玄武が割腹自殺をして軍部を抑えたということだ。そして日本が降伏したらしい」

Target 8. (後書き)

ご意見ご感想評価等よろしくおねがいたします。

ちなみにPV 11, 825アクセス、ユニーク2, 009人になりました。

読んでくださる皆様ありがとうございます。

また次話も出来次第投稿します。

T a r g e t 9. (前書き)

今回は短いですが、重要な話です。
それではどうぞ。

Target 9.

「降伏したらしい」

「え！日本が降伏ですか！」

「ああ、日本政府はこの2ヶ月間隠し通していたらしい、そしていたがやはりトップがいらないと不安定で今日本軍は降伏派と徹底抗戦派で二分されているらしく、やはり限界だったらしい。」

日本の現首相、枢木玄武

このブリタニアとの戦争で徹底抗戦を唱えていたタカ派で有名な男だった。

その男が、日本軍を抑えるために割腹自殺をして亡くなり、しかもそれを、きっかけに日本軍の指揮能力が低下してつい先ほど降伏宣言をしたというのだった。

そのニュースはたちまち世界を駆け巡った。

In 中東 某都市

「はい陛下、そうですか日本は降伏しましたか。……………はい、わかりました。……………はい……………はいわかりました。」

日本は、降伏したある程度予想できたが枢木首相が割腹自殺するとは思わなかった。

ということは次の中華連邦の次ぐらいには日本での任務だろう。

今ライはEUでの任務と中東での任務が終了し次の中華連邦での任務に行こうとしているところでブリタニア皇帝からの秘匿回線で日本の降伏の真相を聞いたところだった。

「はい、それで中東ですが、今はやはりまだ余力があるようです。・
・・・はい、・・・そうです。KMF、グラスゴーの絶対数と局地
対策がまだな今はもう少し待たれたほうが良いかもしれません。・
・・はい、完全に全てが整うまでは・・・はい。では、皇帝陛下次
の任務の中華連邦に向かいます。・・・・はい、わかりました。
また終わりましたら連絡くいたします。」

そして、次の任務地の中華連邦のインド軍区に向かうのだった。

中華連邦インド軍区

中華連邦の中の1国で中華連邦から独立しようとしている国である。

そしてそのインドでの任務はインド軍区単独での軍事力、内政状況の調査と場所を中華連邦の首都洛陽に移して中華連邦の状況調査だった。

それから翌々日には、インド軍区に入り2ヶ月の調査、首都洛陽で2ヶ月の調査を終えて次の任務地の日本いや名前を変えてエリア11に入った。

エリア11

日本がブリタニアとの戦争に負けてつけられた11番目の植民地という意味で植民地の人間はナンバーズといわれ区別される。しかし、

ナンバーズも名誉ブリタニア人制度で『一応』はブリタニア人にはなれる。

しかし純粋なブリタニア人と名誉ブリタニア人とは確実に違う。

そして今回の任務はあのメンバーでの任務だった

「久しぶりです。クーガーさん、ジュンさん」

「え！ライ隊長！」

「久しぶりだなライ」

「「お帰りなさい」」

今回は8ヶ月に及ぶ長期任務だった

「今回の任務は各地のレジスタンスの勢力地域調査だ」

「難しい任務になる。」

「今回はジュンさんがほとんどになります。よろしくお願いします
ジュンさん」

と笑顔で言ってみる。

そうすると、「ドキッ！」顔を赤らめながら「がんばります。」と言っているジュンと「大人になったなーそんなことまで覚えたか」と感慨にふけている。

翌日は移動日になりその次の日には最初の目的地の鹿児島に着いた。

そして今回は鹿児島から北に行く九州から中国から四国また中国に戻って近畿に行きとどんどん北に行くというものだった。

そして今回の1番の問題なのは終戦後に地下に潜った旧日本軍だった。

ブリタニア戦での日本軍は枢本首相の割腹自殺で、命令系統の混乱等で弱体化はしたもののかなりの余力を残して敗戦したのと、旧日本の技術力と流失したKMFの設計データをもつてすればより強力なKMFを作れると警戒しているためだった。

しかし今回はライの力の使用やジュンもあつて全てが順調に進んだのだった。

そして1年後

In ブリタニア首都ペンドラゴン
ライは久しぶりに本国に帰ってきた。

一週間自由に過ごした後ブリタニア皇帝に呼ばれていたのだった

「失礼いたします。皇帝陛下。」

「うむ。」

「それで話とは何でしょうか？」

「話とはな、お前は皇族に『戻る』気はないか？ いや戻れライよ！」

「え！皇族って！もでれって…」

「そうかお前には行ってなかったな、『我が息子』よ」

Target 9. (後書き)

いかがでしたでしょうか。

ご意見ご感想評価等よろしくお願いいたします。
次も出来次第投稿いたします。

t a r g e t 1 0 .
(前書き)

お待たせしました。
それではどうぞ。

target 10.

「そうかお前には行ってなかったな、『我が息子』よ」

「!!息子ってどういうことですか?!我が?!」

「そうだ、お前はこのわしとマリアンヌの息子で元第17皇位継承者ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアの双子の弟だ。そしてお前の本当の名前はライオネル・ヴィ・ブリタニアという。」

「ライオネル……。ルルーシュ皇子の弟?!なぜ今頃?!そしてなぜ私だけ一般の家庭に、そしてあの研究所へ?」

「本当はもう少し早く聞くつもりだったのだが、時期が合わなくてな。そしてお前を一般の家庭に送ったのは、皇族の掟だ。」

「掟ですか?」

「そうだブリタニアには、双子の皇子が生まれると不幸が国を襲うという伝説があるのだ。それで代々弟のほうは一般の家庭に出すというのだ。そして、その後ブリタニア皇族及び政府はその家庭に干渉しない、干渉されない、というのが掟だ。しかし……」

「あの父と母は金に困って預かった息子を売ったあの組織に……。」「

「そうゆうことだ。そしてお前の兄であるルルーシュが日本戦で死んだ。そこでお前を皇族に戻そうと思ったのだ。いや戻す!」

「イ…イエス・ユア・マジエステイ」

「そしてだ、お前はわしに何か言うことがないか！その能力について！」

「！！！！わ、わかりました。まず、僕は一つ目の施設で2つの能力を与えられました。」

「ほお、そして1つ目の能力が・・・」

「そうです。皇帝陛下が言っておられる能力です。」

「声に出せば聞いた全ての者が従う能力、しかし一人につき1回しか使えません。」

「そうか・・・、そして2つ目とは？」

「2つ目の能力は・・・という能力です。」

「そうか分かった。」

「そこで皇帝陛下、幾つかお願いが。」

「わかった、言ってみよ。」

「1つ目は私の事を公表する際に公表するのは皇族とそれに伴う政府関係者、各エリアの総督のみで、副総督以下の者や他国には、いっさい公表しない。」

「それで。」

「はい2つ目はこれから少なからず任務を続けさせていただきます。そして、3つ目は、その任務の際の活動場所は主に、旧日本、現エリア11で、ということ。」

「そして4つ目、各国事や行事には不参加ということです。後ひとつグレゴリオ・P・クーガーとジュン・アキカワを部下としてもらっても良いですか？」

「わかった。いいだろう。」

「必要な時にこの名前を使わせていただきます。」

「良からう、好きなときに使え。下がってよいぞ。」

「イエス・ユア・マジェステイ」

そう言うトライは謁見の間出て行った。

そして皇族で工作員が誕生した。

In エリア11

今エリア11では各主要都市に租界と呼ばれるブリタニア人の住居区の建設がされていた。

エリア11は元々環太平洋造山帯と岩盤プレートの影響で地震とそれによる火山噴火が多い国だったために、通常の倍以上の耐震免震層が必要だったために建設期間も通常の倍以上かかっていた。

そして東京租界では、その上に学園区、メディア区、総督府等の建

設まであつて、各都市特に東京は大混乱していた。

しかしそのころクーガーとジュンはというと……。

「「カンパーイ」」

「っあゝー！風呂上りのビールはうめーな」

「ッカー！お風呂上りは牛乳ですよ。そういえばそっちの温泉どうでした？」

「良かったぞ、やっぱり温泉は良いな。そっちはどうだった。」

「こっちも良かったですよ。」

と休暇を謳歌し温泉でゆっくりしていた。

本国で自分たちの今後が決定しているとは知らずに、「この後どうなるんですかねー」なんて夕食を食べながら言っている。

そんな時ピリリリと携帯が鳴った。

この電話が二人の人生を変えらるゝと知らずに……。

t a r g e t 1 0 . (後書き)

どうでしたでしょうか？

ご意見ご感想評価お待ちしております。

次話も出来次第投稿いたします。

O u t o f t a r g e t 03. (前書き)

やっと投稿できました。

それではどうぞご覧ください。

Out of target 03.

In 富士山麗京都六家直属秘密研究所

「父さん、姉ちゃん無事だよね？」

「刀真！それもう何回聞いたと思ってるの！」

「美弥子そう怒るな、刀真も純が心配なんだ。」

「孝助さん・・・。」

「ごめん母さん、父さん。俺トレーニングしてくるよ。」

「あっ！刀真・・・。」

そう言う刀真は研究室から出て行った。

日本の敗戦から1週間、孝助と美弥子、刀真は富士山麗にある研究所に施設を移動の移動が終わり研究を開始していた。

刀真は姉の純と一緒に東京に住んでいた。

その日東京の多摩地域に日本空軍の基地を攻撃目標にブリタニアの攻撃があったが、しかし空からの攻撃と陸からのKMFの進行は到底日本軍にはこらえられるものではなかった。

その時に町にも被害が出たのだが、その時に純は（9）の工作員に保護された後に頼み込んで（9）に入り、刀真は紅月ナオトとカレ

ンという兄妹保護された後病院に行きそして親である孝助と美弥子の元に行ったのであった。

そして終戦の1ヵ月前スポンサーである京都六家の桐原氏からの連絡で研究所を富士山麓に移すとの連絡があった。

こっちに來てから刀真は付属のトレーニングジムに通うようになった本人曰く「父さんと母さんの創ったKMFに乗る！」だそうだ。

そして、そのころ刀真は・・・

「98、99、100、101、102・・・・」

と筋トレの真っ最中だった。

最初のころは「姉ちゃん・・・」といいながらルームランナーで走ってるうちに、涙が流れてきたが、1週間たって涙は、流さなくなってきた。

しかしここで孝助と美弥子しか知らないことがあった。

刀真が京都の研究所に來る少し前純から電話があったのを刀真は知らない。

「父さん、久しぶり」

「純！どうした今どこにいる！」

「今、ブリタニアにいる。」

「！！ブリタニアだと！」

「孝助さん！純なの！」

「ああ・・・。」

「私は日本が嫌になった、これからブリタニア側につく。」

「！！！！何だって！」

「今日はそれだけ、母さんにごめんて言っておいて、後刀真には私この電話のことは言わないで。それじゃ・・・。」

ガチャ・・・。

「純！純！」

「孝助さん、純は！？」

「切ってしまった・・・。」

「それで純はなんて？帰って来るんですよね？」

「いや・・・。。。」

「孝助さん！」

「純が『ごめん』だそうだ。そしてブリタニア側につく日本が嫌に

なったそうだ……。」

「後刀真にこの電話の事は言わないでくれだそうだ。」

「純！じゅううううん！」

そして孝助と美弥子は純に言われた通り刀真にはこの電話のことは言っていない……。

それは刀真の今のモチベーションが純を探すことだからだ。

そこで実は純がブリタニア側に付いたとなれば刀真が狂いかねないのだ。

だから言わない、いや言えないのだった。

しかしこの兄妹の運命が深く深く交錯し対立し合っていることを今は誰も知るよしもない。

O u t o f t a r g e t 03. (後書き)

どうでしたでしょうか？

ご意見ご感想評価お待ちしております。

h i s t o r y t a r g e t 0 2 . (前書き)

お待たせいたしました。
更新再開です。

history target 02.

「嫌だよ！行きたくないよ母さん！」

「しょうがないじゃないの・・・」

「父さん！如何にかしてよ！」

「こればかりはどうにもならん！諦めろ！」

「！・・・父さんまで・・・」

「じゃあ連れて行ってくれ。それと約束の金は！」

「よし連れて行け！」

「わかりました。」

「父さん！母さん！嫌だよ、行きたくないよ、母さん、かあさあ
あああん」

「そして約束の金ですが・・・」

そう言うとき見たこともない制服を着た男達はライの両親に向けてゆ
っくりと懐から銃を取り出した。

「さよならだ、ジャクソン・フロリオ、ケイト・フロリオ・・・自
分の罪を地獄で悔いろ！」

リーダーらしき男がそう言うのと全ての銃口から一斉に弾が発射された。

「ボス、被検体候補10856号の保護に成功」

『わかった、すぐに帰還せよ。博士たちがお待ちだ。』

「了解」

そこからライの地獄のような日々が始まった……

最初の実験は死体に向かって銃を撃つところからだった。

そこから始まり数ヵ月後に代表と呼ばれる人物にあった。

その人物は赤の短髪の女性だった。

「C・C・さま今どこにいらっしゃるの？」と1年中言っている女だ。

ライがその代表前まで行くと

「あなたがライ君ですね？C・C・さまがどこにいるか知らない？」

「「「代表！！！」「」「」」

「あら？話し違った？」

「「「「違います！！！！」「」「」」

「じゃあなんだったかしら？」

「「「能力です！！」」」」

「そうだったわ。それだったらいくわよ。全員目をつぶりなさい。貴方はいいわよライ君」

そう代表と呼ばれる人物いうと目を通して脳に直接声が聞こえてきた。

しかし先ほどの代表と声は同じでも口調が違った。

「能力を与えてやる契約しろ！答えは1択だY e sのみだ！」

「えっ！！！！あ、はい？」

「何で疑問形なんだよ！まあいい契約完了だ」

そう言うのと現実の世界に引き戻された。

「これで能力が付与されたわ。使いすぎに気をつけて。後、緑の髪の毛のC・C・って人見たら連絡頂戴。」

「分かりました。」

「これ電話番号直通よ」

と言う代表から電話番号を渡されたライだった

そして次の日から能力の解析が行われ同時に再開された。

2年の月日が過ぎて一つ目を出て2つ目の研究所に入って半年が過ぎたころ・・・

『実験56番の263項から313項までだ。』

「実験内容は？」

『敵基地への侵入及び殲滅、撤退戦だ。』

「308項から313項までの撤退戦は一昨日に完了したはずだが？」

『ちょっと待ってろ・・・分かった変更だ、56番の263項から307項と357項から最終項までだ』

「了解」

『それじゃあ56番の263項から307項と357項から最終項の敵基地への侵入、諜報活動及び殲滅戦だ。条件設定、能力の使用は2回まで』

「OK・・・」

『それじゃあミッションスタートだ。』

「開始する。」

h i s t o r y t a r g e t 0 2 . (後書き)

ご意見感想評価お待ちしております。

t a r g e t 1 1 . (前書き)

お待たせいたしました。
本編です。

t a r g e t 1 1 .

「もしもし?」

『もしもしジュンか? ライだ』

「ライ! 久しぶりです。」

『今どこにいる?』

「温泉ですけど・・・」

『分かった。東京に帰ってきたら連絡くれ。』

「分かりました。それじゃあまた。」

『ああ、またな。それと東京に帰ってきたらチームライ復活だ。よろしく』

「!?!?! えっ!?!?!」

『じゃあ』ピッ・・・・・・・・

「ジュン、誰だった?」

「ライでした・・・」

「何だって?」

「チームライ復活だと言っていました。」

「何かあると思ってたけどこれだったのか。」

In東京

「よしこれでOK。」

と、電話を終えると建設が終わった総督府庁舎に向かった。

「証明書の提示を」

「これで大丈夫ですか？後、クロヴィス総督にお会いしたいのですが？」

「はい、大丈夫です。お通りください。クロヴィス総督ですか？この先の受付でお申し付けください」

「分かりました。」

「ご用件は？」

「エリア11総督のクロヴィス・ラ・ブリタニア殿下にお会いしたのですが？」

「アポイントは、お取りでしょうか？」

「いいえ。クロヴィス殿下にライオネルが来たと伝言して頂けませんか？」

「少々お待ちください・・・・・・・・・・・・・・・・はい・・・・・・・・はい・・・・・・・・分かりました。お待たせいたしました。それでは総督執務室までご案内いたします。」

「大丈夫です。場所は分かりますから。」

「え、でも。」

「大丈夫ですよ。それじゃあ。」

「失礼いたします。」

「入れ。」

「はじめまして殿下。」

「お前が・・・・・・」

「はい殿下、ライオネル・ヴィ・ブリタニアにございます。」

「ヴィ！？お前はルルーシュの・・・・・・で、用件は？」

「これから、このエリア11で活動させていただきます。」

「活動？」

「はい、私元々皇帝陛下直属の工作員で、陛下の命でこのエリア1に着任いたしました。」

「陛下の命？」

「はい。それで着任の挨拶に。」

「それだけか」

「いや、後このエリア1に着任いたしましたので同じ皇族のよしみ、いつでもご連絡いただいたら直ぐに参上いたします。」

「ほお。本当か？」

「はい。同じ皇族で同じエリアにいるもの同士ですよ殿下。オッと申し訳ございません時間が来てしまいました。これが私の電話の番号でございます。それでは失礼いたします。」

「ああ。何かあったら、使わせてもらう。」

「それでは失礼いたします。」

そうゆうと執務室から出た。

「よし租界に繰り出すかな。まず住む所探さないと。」

t a r g e t 1 1 . (後書き)

どうでしたでしょうか？

現在、原作の新宿ゲッターに参入するか、クロヴィス殿下殺害をどうするかを考え中です。

何か案がある読者様が居りましたらどうかよろしくお願いいたします。

その他ご意見ご感想評価等ございましたら、よろしくお願いいたします。

t a r g e t 1 2 . (前書き)

お待たせしました。

大体の道筋が決まりました。

それではどうぞ。

target 12.

「君いくつだよ？」

「私ですか？」

「君意外に誰がいるの？てゆうか、君18歳以下でしょ？」

「そうですね。確かに僕は18歳以下ですんね。でもこれでどうですか？それでも貸して頂けないのならこの店潰しますよ。」

そう言うときライは胸ポケットからあるカードを取り出した。

「潰すってあなた。！！！これは！申し訳ございません。ブリタニア軍の方でしたか申し訳ございません。しかも伯爵様のご子息様でしたか。で、どのような物件をご所望でしょうか？」

その紙は公式に偽造され身分証明書だった。

一見矛盾して思える『公式に偽造され身分証明』だが、皇帝陛下に頼みつくってもらったものだ。

一応伯爵子息で東アジア方面軍に入隊したてと言うことにしてもらった。

なぜ、東アジア方面軍にしたかという単純に日本にいるからということもあるが、現在のブリタニア軍の重要侵攻地点が主に3つある。そのうちの1つが、この世界の3大勢力と呼ばれる1つのEUのあるヨーロッパ方面と現在進行中の中東方面にもう一つの三大勢

力中華連邦もあり現在の技術には必要不可欠なレアメタルのサクラダイトの最大産出国である現エリア11、旧日本のある東アジア方面の3つなのだ。

そしてその重要地点に今、今この年齢で赴任をしてきたということ
は将来有望であるということをお知らせすることができるということだ。

そうすれば、不動産の場合滅多に出ない物件を紹介してもらえると
考えたのだった。

「私の父親は今本国で働いてるんですが、『家どうすればいい？』
って言ったんですが自分で何とかしろですってひどいですよね。」

「そうでございますね。それで物件のほうなんでございますがこれ
なんてどうで御座いましょう？」

そうして提示されたのが超大穴物件だった。

その物件が学園地区にも近く総督府にもそんなに遠くなくちょうど
いい場所にあり、最近建てられた物件でかなり大きいのにそれほど
高くもなくどちらかというと、場所、物件、広さで言ったら安い部
類に入るほどだった。

「かなり安いですね？なんかあるんですか？」

「実は、東京租界の構造上その場所は丁度つなぎ目になるんです。
他はそんなことないんですが、そこだけなんですよ。」

「そこ買いましょう。いくらですか？」

「土地代と建物代込みで——————ブリタニアドルです。」

「そういえばこの店ってテロリス「あああああああっ！わかりました0一つ減らしますよ。」さすがご主人、裏でかなりの額儲けているだけありますね。」

「あなた何でも知ってるんですね。」

「まあそれはいいとして入居はいつからできますか？」

「いつからでも大丈夫ですよ。」

「じゃあ、0一つ戻す代わりにその家にあう家具をよろしくお願いします。もちろん家具込みであの値段で、それともう二人その家に住みますのでよろしく。その家なら大丈夫ですよね？」

「大丈夫です。後10人でも大丈夫ですよ。期限はいつまでですか？」

「じゃあよろしく願います。できれば、明後日までに。できなければ1週間以内までに。」

「明後日はさすがに無理ですが、1週間以内までには用意します。それまではどうされますか？」

「ウィークリーの部屋とかありますか？」

「ありますよ。特別に無料でお貸ししましょう。そのかわりに……」

「わかっていますよ。」

「では、これがそのウィークリーの部屋の鍵と地図です。それでは1週間後にまたお越しいただけますか？」

「わかりました。それでは1週間後に。」

そう言うと言いは不動産屋を出てウィークリーの部屋に向かった。

そのころクーガーとジュンはというと……

「くううー！ー！風呂上りのビールは最高だぜ！」

「クーガーさん！飲みすぎです！」

「露天で熱燗！風呂上りのビール！絞めのポン酒！これはやめられねえな。」

「確かにいいですけどお！」

まだ温泉でゆっくりしていたのだった。

t a r g e t 1 2 . (後書き)

どうでしたでしょうか？

皆様のおかげで総合評価105件になりました。

これもひとえに読んでくださる皆様のおかげです。

ありがとうございます。

後、u m b r e l l a - t a i l 様ご指摘ありがとうございます。

ご指摘のところを直しました。

これからもこの作品をよろしくお願いいたします。

t a r g e t 1 3 .
(前書き)

お待たせしました。
それではどうぞ！

t a r g e t 1 3 .

P r i r i r i r i r i

「「おいしい、ジュンそろそろチェックアウトの時間だぞ!」」

「分かりました。じゃあ20分後にエントランスに集合しましょう。

」

「「分かった。じゃあ後で。」」

そうクーガーが言うと電話が切れた。

この1週間ジュンとクーガーは違うホテルや日本風の旅館など色々なところに宿泊した。

合計で10日間だった。

残り、1週間となったちょうど空きの日の昼ごろライから電話があったのだった。

あの時、「東京着いたら連絡くれ。」と言っていたライだったが1日に1回は夜に連絡があった。

東京租界での活動拠点を確保したこと、ジュンとクーガーの設定など、色々だった。

元々休暇の予定来たエリア11の温泉だったが、途中から任務になっていた。

それも終わり、やっと東京租界に帰れることになったのだった。

「おい！ジュン遅いぞ！」

「すみません。で、チェックアウト終わりました？」

「とっくに終わってるよ。」

「じゃあ行きましょう。」

そう言うと、ポケットから車の鍵を取り出した。

「お前！運転する気か？！」

「何で？だめですか？」

「だめも何も、お前の運転じゃ車がいくつあっても足りないぜ！お前、別名、備品の破壊王じゃないかよ。しかもそのうち半分以上が任務で使った車じゃなかったか？」

「確かにそうですが、いささか失礼過ぎませんか？まだ20歳もいってない女子を捕まえて、備品の破壊王だなんて！」

「真実を言ったまでだよ。まだ20歳もいってない女の子のジュンちゃん。」

「なんか馬鹿にしてませんか？」

「いや、そんなことないぞ！」

それからジュンの運転で家まで着いてから30分たったころまで、後部座席でハムスターのように震えながら体育座りをして「イエス、マイロード」と言っていたのはジュンとライとあと一人しか知らない・・・。

もちろん新車同然だった車が租界につく頃には廃車寸前だったのは言うまでもない。

t a r g e t 1 3 . (後書き)

いかがでしたでしょうか？

その他ご意見ご感想評価等もよろしくお願いいたします。

T a r g e t 1 4 . (前書き)

お待たせしました。

Target 14.

「1週間ぶりです、ご主人。首尾は万全ですか？」

「それはもちろん万全で御座います。」

「それではご案内いたします。」

「よろしくお願いいたします。」

「それでは、物件のほうに……。」

そう言うのと、不動産屋のご主人は胃薬を飲むと出発するようにライに促した。

店舗を出ると不動産屋は、自身の小さな店舗とは不釣り合いの高級車に向かった。

それは、最近出たばかりの最新モデルだった。

「かなり儲けているんですね。」

「おかげさまで、上々で御座います。」

そう言うのと2人はその高級車に乗り目的地に向け出発した。

「またアンダーの方のかたと大きな取引があったみたいですね。」

「!! 貴方にはかないませんね、ちょっと大きなのがあって一人勝

ちって所ですかね。ちょっと値引きいたしますよ。」

「ほんとですか？ありがとうございます。」

「5% off ですか？」

「取引成立ですね。」

といったところで車が止まった。

「ここですか。」

「良い屋敷でございましょう？」

「そうですね。」

と店の主人と会話していると後ろにボロボロの最新モデルの高級車が止まった。

よく見ると、女性が運転し、男性が後部座席で体育座りをしていた。

ライがよくもこんなに最新モデルの車をボツロボロに出来るもんだと不動産屋の主人と話していると良く知った人が車から降りてきた。

「ライさーん、お久しぶりです。」

「！！！！！ジュンさん！？てことは後部座席の方は……………」

「お父さんクーガーさんです。」

「ですよね……。」

「えっと？こちらの方は？」

「同居人です。」

「そうですか。はじめまして、〇〇不動産のトムといいます。よろしく願います。」

ジュンにそんな挨拶をしている不動産屋の主人の名前がトムだと始めて知ったライだった。

「はじめまして、ジュノー・クーガーです。それでこっちが父のグレゴリオ・P・クーガーです。よろしく願います、トムさん。そうだライさん何か銃持ってます？」

「ちょっと待て、……。ダブルアクションのリボルバーでいいか？何に使うんだ？」

といいながら、ジュンに投げ渡した。

ジュンは、「もちろん大丈夫です。」といいながらさも当たり前かの様に撃鉄を指で引くと後部座席に向かって『ニヤリ』と笑いながら引き金を引いた。

BAN！BAN！BAN！BAN！BAN！

その瞬間に窓ガラスがわれクーガーの足先5cmほどのところに全弾着弾した。

「銃の扱い上手になりましたね」

「そうですか！がんばって練習しましたから。」

そんな事言っているとトムがオロオロしながら「そこなんですか！
？お父様は大丈夫なんですか？」といっている。

「そんなことより中を案内していただけますか？」

「私の話は無視ですか……。分かりました、ではこちらにどうぞ。」

「よろしくお願いします。」

そう言い、ジュンとライ、トムが屋敷に入ろうとすると・・・

バキッ！！！！

と言う音ともに車が崩壊しクーガーが復活した。

そして数歩歩いたところで、

ドッカーン！！！！！！

と車が爆発した。

それとともに尋常じゃない殺気が感じられたと思ったら急にそれが
無くなった。

「俺系復活技、ピンチで脱出するライバル仲間に！」

「何ですかその技の名前、かっこ悪いですよ。それよりお久しぶりです。」

「久しぶりだなライ君。」

「それじゃあMr. トム行きましょう」

「はい、分かりました。」

それで4人は家に入った。

まあ、何もなく家の紹介が終わった。

そして不動産屋のトムが帰った。後突然携帯電話が鳴った。

表示を見るとクロヴィス総督と表示されていた。

『ライオネルか、一つ頼みたいことがある良いか？』

「はい、なんでしょうか。」

『栃木ゲッターで大きな反抗が起きそうと言う報告が来た。だが今割ける人員はそう大きくないだから皇帝陛下に頼んで君たちを派遣することに了解いただいた。なので、よろしく頼む。詳細は直ぐに端末に送る。頼む』

「分かりました。殿下、KMF3騎の使用許可を！」

『わかった。確か特派が丁度エリア11にいる、3騎をそっちに送
っておく。』

そう言うと電話が切れた。

T a r g e t 1 4 . (後書き)

いかがでしたでしょうか？

ご意見感想評価等お待ちして折ります。

t a r g e t 1 5 .

(前書き)

お待たせいたしました。

t a r g e t 1 5 .

「クーガーさん、ジュン仕事だ。ジュン通信端末の確認し作戦内容の確認、クーガーさんは銃器類を含めた装備の調達をお願いします。」

「Yes, My Lord」

「それと2人ともKMFは騎乗できますよね？あっ！そういえば言うの忘れてましたけど、僕一応皇族になったというか戻ったんで、よろしくお願いします。」

「「一応騎乗できますけど？・・・！！えーーーーっ！！皇族ですか！？」」

「OKじゃあ騎乗することになるかも知れないのでクーガーさん準備よろしくお願いします。」

「わかった。で、皇族ってなんでだ！」

「そうですね、皇帝陛下に呼ばれて行ったら・・・・・・・・・・というわけです。」

詳細はt a r g e t 9の最後からt a r g e t 10の最初のほうを参照してください。

「そうだったのおまえは閃光のマリアンヌ様の子供だったのか・・・」

「マリアンヌ様ってあの閃光のマリアンヌ様ですよ、あのテロリストの襲撃で殺されたっていう・・・」

「違う！あれはテロリストの襲撃じゃない！あれは、あれは・・・」

「えっ！クーガーさん？」

「悪い、カッコわりい所見せちまったな。それより準備だ！早くクロヴィス殿下からなんだろう？」

「はい。それでは、10分後に出発だ。」

その言葉を聞いて先程までの雰囲気を更新し、作戦前の張りつめた雰囲気になっている。

そして、家から出発して特派のトラックと合流して栃木に向かい再び出発した。

そして今、ライは廃棄ビルのからスナイパーライフルで射撃、ジュンはKMFでの敵の掃討、クーガーは情報収集とジュンへの通信そしてライの援護が担当だ。

「「こちらJ、エリアB7の敵機動兵器群の掃討完了。」」

「「こちらP了解、次はエリアD8の敵機動兵器群の掃討だ。」」

「「了解。」」Pi.

「さて、こちらだが・・・」

「だめですね…。いくら探しても目標は居ませんね…。」

「しょうがない次のポイントに・・・！！居たぞ！」

「何処ですか！？」

「1時の方向のビルの中だ！」

「……………、目標発見。」

「結構イライラしてますね。」

「ああ、行動が不安定になっている。一旦ジュンを下げよう。」

「お願いします。」

「「こちらP、J一旦補給もかねて、エリアA1まで下がれ。」」

「「こちらP、了解」」

「これで少し行動が安定するといいんですけどね・・・」

「大丈夫、奴は素人だ。」

「そうですね。」

……………

「目標がいすに座った！よし、いけるぞ。」

B
A
N!
B
A
N!
B
A
N!

「「ジュン、こっちは終了した。後はロイドさんの新兵器の実験に
実戦で付き合っ上げて。」」

というところでロイドさんの「やった!」という声が聞こえたが、これを少しにやけながら「ジュン、御愁傷様」と思いながらクーガーと指令本部向かい、クロヴィス殿下にどう報告しようかと考えながら歩き始めた。

だが、依然として小さい勢力からの反抗が大きく、ブリタニア軍が威力が大きいとしても地の利を生かした戦法を使われたらいくら高

性能のKMFといえど性能を十分に性能を発揮しきれるものではなかった。

なので、戦後4年も経つと弱小勢力はほぼ無視されほぼ幾つかの規模以上の勢力に集中してきた。

特に日本海側の東北、北陸にかけてが、特に激しかった。

旧日本の交通が使えるれば良かったのだが、しかし日本占領戦でほとんど破壊してしまい現在日本各地に向けてのリニアモーターカー計画が着実に実行されてはいるが、現在やっと工事が開始されたばかりで仕えないとなると空路か車両での輸送になってしまう。

そこで活躍したのがライたちだった。

ライたちの任務は主に、対空兵器の破壊だったが、時々要人の救出などもあった。

これもあって、東北の殆どのテロ組織が壊滅した。

そして、この頃から、日本解放戦線にっぽんかいほうせんせんと名乗る組織が目立った活動を見せ始めた。

この組織は、無頼むらいというブリタニア製KMFグラスゴーの改造と思われるものを使って日本各地で反攻を見せてきていた。

そして、この日本解放戦線の登場以降エリア11での政局も戦局も一層不安定になっていくのだった。

t a r g e t 1 5 . **(後書き)**

堅苦しすぎると言う意見がありましたので、次回の投稿からなるべく1人称中心でやっていきたいと思いますが・・・。

しかし、なにぶん擬似3人称みたいなことをこれまでやってきたので出来るかどうか・・・。

そしてこれから、今までの投稿分も確認して修正してきたいと思います。

ですので、これからもご指導お願いいたします。

そしてご意見してくださったk a j u様ありがとうございます。

t a r g e t 1 6 . (前書き)

お待たせしました。

やっと出来ました。

大変だった・・・

ちなみに書くまでライとスザクの出会いを書くのを忘れてました。
それではどうぞ。

t a r g e t 1 6 .

「クロヴィス殿下、今エリア11で一番大きい反ブリタニア組織は、日本解放戦線と申しまして……」

「旧日本軍なんだろう！何回も聞いた！それ以外の事を教えろと言っているんだ！」

「そう申されましても……。後KMFを使っていることからバツクには大きな支援組織があるという事ぐらいしかわかりません。」

「もういい！さがれ！」

「でs「さがれと言っているんだ！」—Y e s、Y o u r H i g h n e s s（イエス ユア ハイネス）！」

そう言うとき髭ずらの参謀は執務室からでていった。

「サムライの血の件もあるというのに……。」

そう言うときクロヴィスは顔を歪めながらどうするかを思案していた。
……。

I n 旧つくば研究学園都市
「貴様等！今回は、イレブンのテロリストの抹殺だ！同種のサルのおいをかぎ分ける！」

「「「「「Yes, My Lord.」」」」」

「それでは、名誉部隊行け！テロリストは見つけ次第抹殺！」

それを聞くと名誉部隊と言われた者達はいっせいに解散しそれぞれに散って行った。

「「HQ, point A-1 クリア。」」

「「こちらHQ, point A-1 クリア了解。作戦を続行せよ。」

「「了解。」」

「「HQ！！こちらpoint C-5 敵KMFを発見！しきゅうう
うああああー」」

「「point C-5！point C-5！応答せよ！指令！point C-5との連絡が途絶えました。敵KMFを発見後全滅したも
ようです。」

「KMF、ヴィンデル隊及びクーガー隊を出せ！」

「了解。ヴィンデル隊及びクーガー隊はpoint C-5付近の敵
の掃討の任務に当たれ。」

「「「こちらヴィンデル、任務了解！」」

「「「こちらクーガー隊、任務了解！」」

今回のライたちはクーガーとジュンがKMFでライが地上から言うことになった。

そしてクーガー隊はクーガーと新人が2人。

ジュンはヴィンデル隊に入っている。

そしてこのヴィンデルは元？の工作員で現在はブリタニア軍東アジア方面軍のトップクラスの小隊長になっている人物だ。

今回そのヴィンデル隊に欠員が出たために補充要員が本国から来るまでの間「良い経験だから」と言われ出向しているのだった。

ちなみに気が付いている人もいるだろうが、ジュンは戸籍上はクーガーの養子になっている。

そして、そのクーガーは本国からの臨時隊長ということで新人2人に教育と言う名の地獄の訓練を受けさせていた。

そして今回の作戦にお呼びがかかったのだった。

さて、ライだが基本的には今回の作戦ではフリーに動いている。

なぜかと言うと、ぶっちゃけるとやる事が無かったからだが、今は名誉ブリタニア人の歩兵部隊と一緒に行動している。

「HQ、こちらpoint Q-7敵勢部隊を確認戦闘を開始する。」

「「HQ、了解。」」

そう言うのと戦闘が激しい方へ走り出したので呼び止める。

「ちょっと待て！ここは一旦後退しろ！」

「でも！命令だ」

「Yea , My Lord」

歩兵の場合は階級は分かりやすいようになっている

「point P－5まで下がれ！」

それを聞くと敵の位置を確認しつつ後退して行ったがその身体能力の高さが分かった。

それから少したってから、ライが後退し始めて少したった時に戦闘の激しかった所ら変で大きい爆発があった。

そして合流pointにつくとそこにいたのは、ライを含めて4，5人だった。

そこにつくと先ほどの歩兵から話しかけられた。

「少尉、先ほどはありがとうございました。」

「君はさっきの・・・」

「はい、枢木スザク1等兵であります。」

そういつてヘルメットをはずすと同じぐらいの年齢のの天然パーマ

の少年だった。

「枢木？　そうか君が……。僕は、ライ・J・フロリオ少尉だよろしく。まあいい、早速だが聞きたいことがあるんだがいいか？」

「はい。」

「そう硬くならないで多分同じ年だから。」

「でも。」

「じゃあ、今から友達だ。僕もスザクって呼ぶから、君もライって呼んでくれ。」

「えっ!!！」

「じゃあ聞くけどさ、いいか？」

「はい。」

「だから！　スザク！」

「分かったよ、ライ。なんだい？」

「君の戦う理由はなんだい？」

「僕の戦う理由？　何でそんな事聞くんだ？」

「あの時の君の戦い方は異常だったからさ。」

t a r g e t 1 6 . (後書き)

ご意見ご感想評価等待着っております。

かなり遅れましたがゆーたん様ご意見ありがとうございます。
後私事ですが、ブログはじめました。私のマイページから飛べます。

t a r g e t 1 7 . (前書き)

今回で序章は終了です。
かなり短いですがどうぞ。

target 17.

「あの時の君の戦い方は異常だったからさ。あの時の point P
—5まで後退と命令が出たはずだから。」

「そんな事無いよ。僕の小隊のメンバーを援護しに行こうとしただけだよ。」

「そうか、分かった。ちょっと待った。……………」
「……………。こちらライ少尉了解。スザク、戦闘が終わった。本部
に集合だそうだ、行くぞ！」

「分かった行こう。」

そこでスザクとの話は終わった。

In 特派トラック内

「ねえ、ライ君良いデヴァイサーいない？」

「少々僕でやっというてまだいるんですか？」

「だってえ、君時々しか来ないんだもん！あつそうだ！なら今うちで開発中の新型の KMF のデヴァイサーにならない！」

「いやですよ、ロイドさんの作る機体ってピーキーなんですもん！」

「でもおゝ。」

「あっ！一人乗れそうな心当たりがありますが、名誉ですけどいいですか？身体能力は保証しますよ。それでも良ければ、紹介しますよ？」

「大丈夫騎乗関係はこっちで何とかするから。じゃあよろしく。」

「わかりました。こっちで騎乗テストしてデータ送りますよ。」

「やったあー！よろしくお願いしますよ、ライオネル殿下。」

「わかりました。」

Piririririri.

「「もしもし、スザク今暇？」」

「えっ！！ライ、何いきなり！？」

「「今暇？」」

「今、軍務の休憩中だよ。」

「「わかった、そういえば君今何隊だっけ？」」

「えっ？僕？僕は第24歩兵中隊の13部隊だよ。」

「「わかったまた後で！」」

P i.

「切れちゃった……。」

ライからの電話が切れてすぐに訓練が再開された。

P r i r r i r i.

そして少ししたら、今度は教官に電話がかかってきた。

「はい！……はい、……はい、わかりましたすぐに向かわせます。」

「「「「「758、759、760、……」」」」」

「樞木1等兵！」

「はい！」

「おまえはこれから別メニューだ！」

「えっ!？」

「返事はどうした！」

「Y e a , M y L o r d .」

「それでは、貴様は今日、KMFの騎乗訓練テストだ、特別教官がつくから覚悟しておけ！」

「Yea , My Lord .」

「駆け足で行け！」

「はい！」

「失礼します！ 枢木スザク1等兵到着しました。」

「遅かったな、枢木1等兵！」

「すいません。」

と言い、頭をあげるそこにいたのは、ライだった。

「久しぶりスザク。」

「えっ！！！」

「今日の教官って君？」

「そうだ！ 今から終わるまでは教官と呼べ、枢木1等兵！」

「失礼いたしました、教官！」

「それじゃ始めるぞ。まずそのシミュレーション装置に乗ってくれ。」

「Yea , My Lord .」

「シミュレーションナンバー1〜50まで一気にやるぞ！」

「えっ！でもライ少尉無茶です！」

「大丈夫だ！問題ない！彼なら。」

「わかりました。それでは始めます。」

というテストという名の地獄の訓練が始まった。

というのは、実はテストはシミュレーション1〜20までで完了し、そのあとは通常の訓練メニューになるからだ。

そして、そのテストは訓練メニューの最終番号まで、行われ、その結果を見たロイドは「やったー、本当に良いデヴァイサーだよおーこれは！」と言っていたそうだ。

t a r g e t 1 7 . (後書き)

如何でしたでしょうか？

次回から原作に入ります。

ご意見ご感想評価お待ちしております。

t a r g e t 1 8 . (前書き)

お待たせしました。

クリスマスなんで知らないよ。

今回から原作です。

それではどうぞ。

t a r g e t 1 8 .

「バトレー將軍！CODE—Rがテロリストによって強奪されました！」

「なんだと！なんとしても取り返すのだ！」

「Y e s , M y L o r d !」

「くそ、この失態が皇帝陛下に知れたらどうなるか！そうだ殿下に知らせなければ！」

そう言うときクロヴィスのもとへ急ぐのだった。

「殿下、そろそろお時間でございます。」

「そうか分かった。すみません皆さん放送の時間ですので一旦失礼します。」

「殿下、一回殿下の放送している時のお姿が見たいわ。ご一緒しても？」

「どうぞ、それでは一緒に行きましょう。」

「それでは、放送を始めます。5・・4・・3・・」

そこまで言うのとディレクターらしき人物は手で2そして1を出し開始の合図をクロヴィスに出した。

『お待たせいたしました、ブリタニア帝国第3皇子クロヴィス殿下会見の時間です。』

『帝国臣民の皆さん、そして協力いただいてる大多数のイレヴンの方々も。わかりますか？今、私の心は半分引き裂かれています。悲しみと怒りの心にです。しかしエリア11を預かるこの私がテロに屈するわけにはいきません！なぜならこれが正義の戦いだからです。すべての幸せを守る正義の！さあ、皆さん正義に準じた8名に哀悼の意とともに捧げようではありませんか。』

『黙祷』

少しすると放送が終わり、町では何事もなかったかのようにすぐに日常に戻っていた。

「素敵でしたわ、殿下。」

「先程までパーティーを楽しんでた方とは思えません。」

「総督はエリア11の看板役者ですからね。このくらいの変り身は・・・。」

「まあ、自信がおりますこと。」

「心構えですよ。自信などメディアの方々が喜ぶだけです。」

そう言うところクロヴィスは背後にいたメディアの関係者のほうをむく。

「いいえ、私どもはクロヴィス殿下の知性に少しでも助けになればと。」

そんな談笑をしているとバトラー將軍が入ってくる。

「殿下！」

「なんだ無粋な・・・。」

「申し訳ありません、しかし！」

「どうした。」

そいうと周りには聞こえない声で話し始める。

しかしその話を聞いていくうちにどんどんとクロヴィスの顔が変わっていった。

「愚か者！」

「警察にはただの医療機器としか・・・。全軍を動かすも「直属を出せ！ナイトメアもだ！」了解しました。」

「本庁へ、ターゲットは開発途中で放棄された軍用ビルの・・・」

「待て、本件は軍に移った、バトラー將軍だ。」

「將軍!？」

「ヴィレッタ、キューエル、殿下から勅命だ、発進準備をしろ!」

「Yes , My Lord!!」

「アラート1発令!アラート1発令!第4、第7、第8甲騎陸戦中隊ならびに第31航空機中隊は直ちに発進。第9特装師団スタンバイ。」

そうアナウンスがかけると、東京租界エリア11総督府にある基地ではKMFのパイロット、整備士等がほとんどのものが忙しく動いていた。

そして基地からナイトメアVTOLにに載せられたナイトメアや航空機が続々と先発隊発進していった。

それとともにG-1ベース以下本隊のの発進準備が進められていた。

Pirrirrirr……

「「もしもし、久しぶりね、ライ、元気してる？」」

「もしもし、久しぶりです代表。どうしたんですか？」

「「今、トウキョウ租界にいるのよ。」」

「えっ！エリア11にいるんですか？！」

「「ええ、今空港だから迎えに着て。」」

「分かりました、すぐいきます。」

そう言い、携帯を切ると急いで準備を始める、そうバタバタしていると、ジュンやクーガーがそれぞれのいた部屋から出てきた。

「ライ、どうしたんですか！？」

「いやちょっと空港まで行って来るから車貸してくれますか？」

「いいですけど、どうしたんですか？」

「ちょっと古いなじみがトウキョウに来てるみたいで、迎えに行つてきます。」

「ホイッ！鍵だ。」

「ありがとうございます。ちょっと行ってきます。命令きたらメールで教えてください。」

「OK、分かったZE!」

「よろしくお願いします。」

そうしたらライは急いで家を出て行った。

見送る2人は・・・

「女性ですかね・・・」

「ライにも春が来たか？」

と言いライを送り出した。

t a r g e t 1 8 . (後書き)

途中まではアニメを聞き取って文章にしました。

大変だった・・・。

後、PVアクセス80000、ユニークアクセス120000突破しました。

ありがとうございます。

これからもがんばって生きたいと思います。

次の更新はと年明けを予定しております。

感想評価ご意見待っています。

「ここはこういう風にしてくれ！」等何でもいいです。
それでは良いお年をお迎えください。

T a r g e t 1 9 . (前書き)

すいません寝落ちしてしまいました。

1ヶ月ぶりです。見難かったりするところもありますがどうぞ。

Target 19.

「久しぶりです、代表！」

「久しぶりですね、ライ。」

そう言うのと、代表こと、U・^{ユーツ}U・はライに抱きついた。

「代表恥ずかしいですよ。」

「いいじゃない、貴方は私の息子みたいなものなんですから。いつものように呼んで？」

「まあいいですけど。1年半ぶり母さん、ペンドラゴンであって以来です。」

「久しぶりねこんなにたくましくなって。」

「それでは行きましょうか。」

そしてライとU・U・は空港の駐車場まで話しながら歩いていった。

「そういえばどうしてエリア11に？」

ライは運転しながらU・U・に聞いた。

「ちょっと思うところがあったね。」

「またC・C様ですか？」

「そうなのよ饗団の饗主の座をV・Vに明け渡すまでは分かっていたんだけど、ここ2、3年エリア11でブリタニア軍のある部隊が緑髪の女を追っかけていたって情報が多くて。」

「その緑髪の女ってのがC・C.ですが？」

「言っていなかったっけ？」

「聞いてないですよ、なら緑髪の女なら前、終戦直後に見ましたよ。」

それを聞くとU・U. はびっくりしたと思ったら急に興奮しだした。

「えっ!!！」

「言いませんでしたっけ、ある田舎の神社で見ましたよ。」

「どこの神社?!」

「枢木神社ってとこですけど……。日本の最後の首相、枢木玄武の家ですよ。」

それを聞くとU・U. は見落としていたと小さくライに聞こえないぐらいにつぶやき、とても悔しそうな表情をする。

そこで新宿ゲッターに近づいた時急に軍の無線が入ってきた

「「キャメロン卿、ウィリアム卿、ネヴィス卿POINTB・4に移動敵勢力POINTC・4に移動」」

「「Yes, My Lord」」」

そこでライとU・U・の間に一瞬静寂が訪れた。

「ライ！新宿ゲッターの地図ある？」

「後ろの席にあります。」

U・U・は直ぐに探し当てると地図を広げた。

ライは車を止めて無線から入ってくる情報に耳を傾け、U・U・は情報をどんどん地図に書き込んでく。

そして10秒ほど考えたあとに急いでもっと情報がわかる場所々に連れて行くようにせかした。

「どうしたんですか？」

と話しかけながら

「このままだと軍がテロリストに負ける。」

それを聞くとライは今まで以上に飛ばして新宿ゲッターに急いだ。

新宿ゲッターへは近かった事とライがとばした事もあり2〜3分位で着くと特派のトラックを見つけて押し入った。

「ロイドさんちょっと失礼します。」

「あら、ライ君どうしたの？」

「車で走っていたら軍の無線が聞こえてそれで・・・。」

と？い摘んで話した。

「・・・まずいわね。」

「どうしたんですか？」

「指揮官が敵の罠にはまってる。」

「今回の指揮官って・・・。」

「はい、クロヴィス殿下です。」

「ちょっと戦闘が始まったときからのデータ見せてもらえる？」

「ちょっと待ってください・・・出ました。」

「5分間隔で見せて。」

「そういえばあライ君あの人はい？」

「ちょっと知り合いです。」

「ライ！出られる？」

「すいません代表、今僕のKMF定期点検中で。ロイドさん！ランスロットは出撃できないんですか？」

「それが、デヴァイサーが新宿^{なか}ゲッターにいて。」

セシルが答えるとU・U・は近くにあったランスロットのスペックを見た。

「確かにこのスペックじゃ一般の兵士じゃ騎乗できないわね」

「はい、そうなんです。」

「現存唯一の第7世代KMFZ・01ランスロット、なかに使われているサクラダイドの比率を高くしたことにより従来以上の運動性能が出せます。」

「でも、高すぎて搭乗者がいない。」

「！！ロイドさん、セシルさん、枢木スザク1等兵を発見しました。・・・！どうやら負傷しているようです。」

「ロイドさんちょっと行ってきます。」

「セシルさん僕も行きます。あとロイドさんランスロットの最終調整よろしく願います。彼なら多分出れますから。」

「分かったよお。さあ最終調整急ぐよ。」

ライとセシルは急いでスザクが収容された野戦病院に急ぎ、ロイドはランスロットの最終調整をはじめた。

T a r g e t 1 9 . (後書き)

どうでしたでしょうか？

感想、意見評価等随時募集中です。よろしくお願いします。

T a r g e t 2 0 . **(前書き)**

3ヶ月以上あけて申し訳ございません。
現実が立て込んで久々の投稿です。
少し短いです。

Target 20.

「起きたか、スザク大丈夫か？」

「ライ？ここは？」

「大丈夫だ。まだシンジュクゲッターだ。」

「クロヴィス殿下の近くだから1番安全なところだけど……。スザク君これが君を守ったのよ。」

セシルはそう言うと言っていた壊れた懐中時計をスザクに見せる。

「防護スーツ内部での兆弾ちようだんを防いだらしい。大切な物なのか？」

「は、はい……。」

そうスザクが返事をすると思えるのは機械の稼動音だけとなった。

その沈黙を破るようにスザクがライとセシルに聞いてくる。

「あの、ルル……。」

「ルル？」

スザクはそこまで言うで一瞬ためらい、今の発言を無かったこととするかのように違う話題にした。

「状況はどうなりましたか？」

「毒ガスは拡散、イレヴンの犠牲者が大量に出た。」

「犯人はまだ見つかってないみたい。」

そう聞くとスザクは少し安どの表情を浮かべる。

「そうですか、まだ・・・。」

「スザクお前にKMFに乗ってもらおう。」

「でも、KMFはブリタニアの騎士候以上の特権のはず、ましてナンバーズ出身の名誉の僕は騎乗すら許されないはず。」

そう言うときスザクが少し下を向いたが、間髪いれずにライが言った。

「お前には資格があるんだよ、KMFに乗るための。」

それを聞くとスザクは驚いた表情をしてライとセシルを見てくる。

「これに乗れば、お前の世界もお前も変わる。」

「望もうと望むまいとね・・・。」

そうセシルが続けた。

「まずいわね……。」

そうU・U・がつぶやく。

そこにちょうどライとセシルが帰ってきた。

「代表、どうしたんですか？」

「ちょっとまずいわね、総督さんの戦術が全部裏目に出ててかなりやばい状況よ。」

「もう少しでデヴァイサーが来ますから直ぐ発進させましょう。」

「いいのおく、バトラー將軍には話しついてるけど。」

そうロイドさんが聞いてくる。

「大丈夫です。後で報告に行きますから。」

「それじゃあ発進シークエンスを開始しようか。」

「嚮導兵器Z-01 ランスロット起動します、ランスロット起動します。ハッチ開放、Z-01 ランスロット起動スタンバイ。パレットの展開を開始する。」

そうアナウンスが入ると救護車両からパイロットスーツに着替えたスザクが出てきた。

それを確認すると目の前にあった救護車両群がランスロットの進行を妨げないように全てどいた。

「そういえば総督の許可にまだ許可とって無かったですね。ちょっと行ってきました。」

「ライ。サングラスしていきなさい。」

ライが行こうとするとU・U・が画面を見ながら言う。

「誰かあなた以外に能力使いがいるわ。何系か分からないから一応視覚系の可能性があるからその対策。」

「分かりました。じゃあ行ってきます。」

後ろでスザクとロイド、セシルが話しながらランスロットの初期機動を開始しようとしているのを見て急いでクロヴィスがいる皇族専用のG-1ベースに向かった。

G-1ベースに着くと護衛の兵がいた。

「所属と階級、名前を言え。」

「新聖ブリタニア帝国東アジア方面軍エリア11トウキョウ総督府付き歩兵教導隊所属ライ・J・フロリオ少尉であります。クロヴィス総督に早急に伝えたいことがあります。」

そう言うとIDカードを見せる。

中に確認するとライをG-1ベースの中に通した。

指揮所に行く間にランスロットが発進したらしい。

ものすごい音が一気に遠ざかっていく。

「どうしたライ。」

中に入ると真っ先にクロヴィスに話しかけられた。

「総督申し訳ございません。特派のランスロットを勝手ながら発進させました。」

「今の白と金のナイトメアか？」

「はい、そうです。」

「状況を打開するにはそれしかありませんでした。」

そう言うのと周りの参謀たちが色々言ってくるがそれを一蹴しらいに向かって

「いい。それよりやってくれるんだろうな？」

「もちろん、この戦場を覆してくれるでしょう。」

そう言うのと不敵な笑みを浮かべたライだった。

そしてクロヴィスにG-1ベースでの待機許可をもらい端のほうによりポケットに入っていたサングラスをかけた。

T a r g e t 2 0 . **(後書き)**

次回もいつになるか分かりませんがなるべく早く投稿したいと思います。

感想、意見、間違いの指摘など随時受け付けています。

T a r g e t 2 1 .

(前書き)

お待たせしました。

Target 21.

この戦いにランスロットを投入したのは正解だった。

テロリストに盗られたと思われるサザーランドを通常ではありえない軌道を取りながら倒していく。

途中イレヴンを助けるなんてこともあったが基本的には上手くいったが、しかし突如G-1ベースで電源が落ちた。

ライはかけていたサングラスをとっさにはずし警戒していると一人の歩兵服を着た男らしき者が入ってきた。

「何者だ貴様！」

暗い中で参謀の一人がそう言うとの他の参謀が全員扉に向かって向いたの見はからったかのように

「お前たちはコンタクトフロアを出て行け！」

最初の一字を言うか言わないかぐらいでとっさにU・Uの言葉を思い出しサングラスを掛けなおし物陰に隠れたライ以外は全員出て行った。

「総督殿まず、戦闘を停止してもらいましょうか。」

「分かった。いいかはじめるぞ。・・・全軍に告ぐ、直ちに停戦せよ。エリア11総督にして第3皇子クロヴィス・ラ・ブリタニアの名の元に命じる、全軍直ちに停戦せよ。」

ライが影から聞いているとどうやら先ほどの歩兵がクロヴィスに銃を突きつけながら話させているようだ。

声から恐怖を感じられないのはさすがはクロヴィスと言いたいところだが、そのような事も言っていられない状況だ。

そしてライがこのあとの出るタイミングをうかがっているとクロヴィスの放送が終了した。

そうすると放送中は点灯していた電気が消えた。

「もういいのか？」

「ええ、上出来です。」

「次は何だ、歌でも歌うか？それともチェスのお相手でも？」

「懐かしいですね・・・」

「ん！」

そうすると歩兵はヘルメットを放り投げる。

そうすると歩兵は銃をクロヴィスに向けながら数歩歩きながら

「覚えていませんか？二人でチェスをやったこと。いつも僕の勝ちでしたけども。」

「何?!」

「ほらアリエスの離宮で。」

「貴様、誰だ！」

「お久しぶりです、兄さん……。」

そしてまた数歩歩くと歩兵の顔が少しの明かりに照らさせやっとなるようになる。

その顔を見た瞬間クロヴィスはハッと息をのむ。

「そして、いるんだろ出て来い。」

「いつからばれてた？」

そう言うライは銃を向けながら影から出てきた。

「お前は誰だ！」

「まず自己紹介は自分からと習わなかったか。まあいいだろう、私はライ・J・フロリオ少尉だ」

「そうか、置き土産に覚えていけ、私は今は亡きマリアンヌ后妃が寵子、第17皇位継承者ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアだ。」

「本当の名を名乗るのなら私も本当の名を明かさなければいけないですね、お兄様。」

「お兄様だ！」

一瞬ルルーシュの顔が驚きの表情になりそして直ぐ疑念の顔に変わる。

「いいのか!？」

そう聞かれるとライは一瞬クロヴィスのほうに首だけむきそして直ぐルルーシュのほうに向きなおす。

「はい、クロヴィス総督。本当は口外してはいけません、皇帝陛下よりある程度は許されております。それでは改めて初めましてです、あなたからしたらですが。私はライオネル・ヴィ・ブリタニアあなたの双子の弟そして神聖ブリタニア帝国第12皇子ですお兄様。」

そう少し悪魔的な微笑を浮かべながらルルーシュに自己紹介するのだった。

Target 21. (後書き)

本当は投稿すべきか最後まで悩んでました。

この回は一部かなり悩みました。

どうだったか若輩者の作者に感想、批判文字の訂正何でもいいので
ください。

お願いします。

アクセス 115, 489アクセス

PV 17, 580人

となりました読者の皆様本当にありがとうございます。
次も出来次第投稿したいと思います。

T e r g e t 2 2 . (前書き)

遅くなり申し訳ございません。

今回はこれまでに1番短いと思います。
それではどうぞ。

T e r g e t 2 2 .

「第12皇子だど!」

「そうかつて皇籍を抹消されいなかったことにされた者。貴様の弟だ! まあ、皇籍に復帰したのは最近だがな。」

「そうか。ならこっちも自己紹介しなければなるまい。私は第17皇位継承者ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア地獄の底から戻って参りました。全てを壊すために。」

「それで何が聞きたい。ここまで来たということは何か聞きたいのだろ。」

「流石、総督だと言うものか。なら教えてもらおうその貴様とともに! お前が知っている母さんを誰が殺したか、何のために、確かに母さんは騎士候だったが出身は庶民だったさぞかし他の后妃からは疎まれただろう。だから聞かせてもらおうぞルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命じる私の言うことに答えろ!」

そういうとルルーシュの目が一瞬赤く光った。

そうするとルルーシュはライに向かって命令してきた。

「さっき貴様が言ったことは本当か?」

「どうだと思う。」

「なに!? ギアスがきかないだど!」

「ちょうどクロヴィスも能力に掛かって覚えてないだろう。やはり代表の言う通り視覚系だったか。能力の全てを把握してから来るんだな、そうしないと今の俺に能力は効かないぞ。」

と言うライの半分はき捨てるように言った言葉を聞くとルルーシュはクッ！っと苦虫をかんだ顔を一瞬すると瞬間ライに銃を向け

「まあいいでは貴様も聞いているといい。」

そう言いルルーシュはクロヴィスの方に向く。

「お前も聞きたくないか母さんの死のことを、そして誰が殺したかを知りたくはないか！」

「興味ないな。」

「何だと！なぜだ実の母のことだぞ！」

「俺は伝統の中に捨てられた存在だ。皇帝陛下には恩は有るがマリアンヌ后妃には生んでくれた以外恩は無い。それも捨てたことでチャラだ。お前とナナリーには母親として映っているかも知れないが俺にしてみれば過去に死んだ后妃に過ぎないのでね。」

「そうだったな。」

「皇帝陛下にその事聞くか？それとも私と一緒に本国に戻るか？」

「なっ！皇帝だと！俺に本国に戻ってまた政治の道具にするのか！」

「そんな命令は出てない単なる提案だよ。」

「そんな提案受けると思っっているのか！」

「思ってはいないさ。君のことも一応兄妹のよしみ報告はしないで
おくよ。」

そう言うときライは部屋から出て行こうとする。

「待て！どこに行く！」

「興ざめたから出て行く。怪我はさせてもいいが殺すなよ。さもなくば君の事をバラスから。」

「それは殺すと言う意味かそれとも存在を公表すると言うことか？」

「どっちだと思う。それじゃあ俺は少し外にしよう2人で話したい
だろ。」

そういいながらライは出て行った。

T e r g e t 2 2 . (後書き)

いかがでしたでしょうか？

感想、誤字の報告等何でもいいのでお待ちして降ります。

T e r g e t 2 3 .

(前書き)

お待たせしました。

一応今回でシンジユク事変は終わりです。
それではどうぞ。

Target 23.

今ルルーシュは困惑していた。

第12皇子の登場、そしてクロヴィスを殺した場合に存在が公表されるもしくは殺される。

そしてクロヴィスを生かした場合でもクロヴィスによって皇族、果ては一皇帝（父親）にまで知られてしまう可能性が高い。

「くそ！こっちがチェックメイトをかけられた。計画は始まったばかりだと言うのに。白いやつが存在にスザクがブリタニア軍に入っていて死んだかもしれない事、そしてギアスを知る12皇子の存在にイレギュラーが多すぎだ！」

ルルーシュは頭を切り替えてクロヴィスに向かい質問をし始める。

「母を殺したのは誰だ？」

「第2皇子シュナイゼルと第2皇女コーネリア、彼らが知っている。」

それを聞くとルルーシュは少し驚きすぐさま次の質問をした。

「あいつらが首謀者か?!」

「.....」

クロヴィスは答えなかった。

「そこまでは知らないか。ならばもう1つ。さっきの第12皇子は本物か？何者だ、知っていることを全て話せ？」

「彼はライオネル・ヴィ・ブリタニア、軍内部では新聖ブリタニア帝国東アジア方面軍エリア11トウキョウ総督府付き歩兵教導隊所属ライ・J・フロリオ少尉という偽名を使っている。彼を知っているのは皇族と各エリアの総督、副総督のみ一般には知られていない。日本降伏から1年5ヶ月ぐらいたったころ皇帝陛下よりの極秘発表があった……。」

そこまで言うとかロヴィスは黙ったのだった。

ルルーシュはそうかとおぼやくと一旦目を閉じてギアスを切った。

ギアスを切ったことで目の前には自分に向けられた銃、そしていたはずのライがない。

クロヴィスは混乱していた。

そしてまた表には出してないがルルーシュも混乱していた。

ギアスをもう1回使ってもいいが確認していない不確定要素が多すぎる。

同一人物に何回使えるか、何回でも使えるのかそれとも1回だけか、そしてライについてもそうだった。

あの感じだとギアスは知っている。

ギアスユーザーである可能性もある。

ルルーシュはそんな事を1秒ほど考えていると聞いていたかのようにライが入ってきた。

「話は終わったかな。それではこれからどうする。これまでと同じような平凡な世界を望むか？それとも疑惑や疑念、策略がうずめいた世界に戻ることを望むか？」

「そ、そうだ！ルルーシュナナリーも生きているんだろ？なら一緒に本国に戻って安全に暮らそう！」

「貴様もそういつて政治の道具にするのか？」

「2人とも話は終わりにしましょう。この話は無かった。ここには私と殿下以外居なかった。ルルーシュもナナリーとの平和に暮らすことを望んでいるようですし。」

「分かった。いいだろう。」

ルルーシュに分からぬようにギアスを使った。

さあそれでは「行きましようか」とルルーシュにいい2人で出て行った。

「さあ、また2人だ。これでここに君が居るのを知っているのは君以外だったら俺だけだ。」

「なぜここまでする？」

「一応兄妹への情け、そして再会記念といったところかな。」

「再会だと！お前とは今日初めて会ったはずだが？」

「そうか・・・、あの時はこっちから一方的だったな。覚えていなか？ 枢木神社のときナナリーともう一人が穴に落ちこちた時のことを・・・。」

そう言われたルルーシュは昔のスザクと仲良くなったきっかけを思い出した。

Out of target 01. を参照してください。

「あの時の走り去って言った子供はお前だったのか。」

「さて、そろそろ私は行こうかな。これからどうするかはお前次第だ。」

pririririri

そう話してると電話が鳴った。

「それでは俺は行く。」

そう言うルルーシュは出口に向かって歩き出した。

それを聞くとライは電話に出た。

「・・・・・・！ 皇帝陛下！」

「なに！」

そう聞くとルルーシュは反応してライのほうに向いたのだった。

T e r g e t 2 3 . (後書き)

いかがでしたでしょうか？

ご意見、ご感想、評価、随時受け付けております。

気がついたらこの小説を始めて1年と1ヶ月と1週間たっております。

これも読んでいただいております皆様のお陰です。

ありがとうございます。

不出来な作者ですが頑張って書いていきたいと思えます。

この作品をこれからもよろしく願います。

T e r g e t 2 4 .

(前書き)

お待たせしました。遅くなり申し訳ございません。それではどうぞ。

T e r g e t 2 4 .

皇帝からの電話の翌日、ライは今本国に帰還していた。

「ライよ、エリア11の状況はどうだ。」

「現在、テログループの活動が多く、KMFの使用も多くなってきた。おり何処から流れたかは目下捜査中です。テロは多分これよりも酷くなっていくでしょう。少々出過ぎかと思いますがよろしいでしょうか？」

「申してみよ。」

「現在のエリア11の状況を考えるとクロヴィス殿下では少々荷が重いかと思います。」

「なぜそう思う？」

「エリア11は終戦時に余力をかなり残し旧日本軍は地下に潜り幾つかのグループに分離、そしてエリア11の各地区でテロ行為が激化それを考慮するとクロヴィス殿下では力不足。武力に長けたおの方がよろしいかと。今のままでは他のエリアまで飛び火する恐れがあります。もう一回ここで自信、誇りなどを叩き潰し今一度他のエリアへの見せしめにしたほうがいいかと。」

皇帝は少し考えると

「分かった。それではコーネリアに行かせよう。中東ももう少しで落ちるだろう。そしてライよ、おまえにはEUに行ってシュナイゼ

ルに協力して取引材料増やしてこい」

「Yes, Your Majesty. それではジュンにはエリア11に残ってもらいましょう。EUには私とクーガーの2人で。ジュンにはこれまでと同じで経験を積んでもらいましょう。」

「分かった。シュナイゼルは現在EUで交渉に行っておる。今すぐにEUに向かえ。」

「それではクーガーとは現地で合流いたします。それと皇帝陛下恐れながらも一つよろしいでしょうか？」

「申せ。」

「今の自分のKMFでは全力出し切れません。専用のKMFを造りたいと思います。それをシュナイゼル殿下のところの特派に依頼しようかと思います。」

「分かった。手を回しておく。」

「ありがとうございます。それではEUにいてまいります。」

そう言うとライは謁見の間を出て行った。

In t o k y o

「ジュン俺は任務でEUに行ってくる。おまえはエリア11でこれまでの任務だ。頼んだぞ。」

「分かりました。」

クーガーはそれを聞くと出て行った。

家を出るとクーガーはライに電話する。

「もしもしライか……そうだ。分かったそっちに着いたら連絡入れる。……OK。」

Some where in the EU
1週間後下調べを終えるとシュナイゼルと会っていた。

「お久しぶりです、シュナイゼル殿下。」

「久しぶりだね、君と会うのは2回目かな。」

「はい本国の帝都ペンドラゴンが最初です。今回は頼むね。」

「はいよろしくお願いします。早速ですが、下調べの段階でEUの主要各国でのサクラダイトの流通量が微量ですが毎月増えているよ。なので新たにアフリカのキリマンジャロ周辺で新たに発見された可能性が有ります。」

「そうか……こまったねえ。毎年会議で配分量決めているのが意味がなくなるねえ。」

「はい。それとドイツ州のどこかで薬物投与の人体実験が行われている模様です。」

「人体実験かい？」

「はい。」

そこでライは出発前のU・U・との電話を思い出していた。

「あの組織から生体改造のデータが洩れたらしいの。」

「情報が洩れた!？」

「そうなの。まあ大体洩らしたやつの見当はついていて始末は終ったんだけどそれがどうもEUらしいのよ。」

「EUでって言うと・・・。」

「大体検討はついていると思うけど・・・。」

そこで少しライは考えるところを考えている事を口に出す。

「ドイツですか？」

「可能性は有るけどそこまでは分からないの。」

「それでは調べてみます。」

T e r g e t 2 4 . **(後書き)**

活動報告にも書きましたがユニークが2万人になりました。
本当にありがとうございます。

1年でこれだけ読んでくださると思いませんでした。
これからも頑張って行きたいと思います。

ご意見、ご感想、評価、随時受け付けております。

T e r g e t 2 5 . (前書き)

お待たせしました。

今回は物語を加速しました。

Target 25.

「くそ！あの副総督様は何考えてんのよ！」

そういいながらとジュンはシンジユクゲッターでKMFを動かしていた。

「「こちらHQ、J・クーガー卿そのエリアの敵を認めず。現在地点よりR-03に向かわれたし。」」

「Yes, my lord.」

そう言うのとジュンは指定されてる地点へエナジーファイラーの残量を計算しながら向かう。

ライとクーガーがEUの調査に入って間もなく、後の第1次シンジユク制圧から1週間もたたないうちに今度は副総督が新宿を侵攻し始めた。

実はライが本国に帰還した翌々日にはクロヴィスは帰還していた。

そして今エリア11の全権を任されているのが、クロヴィスの本国帰還の直前に任命されたのが今の副総督だ。

この副総督は第4皇子で生まれがクロヴィスの2週間後という事でクロヴィスのことを目の敵にしていた事もあり、何を思ったのかこの男就任早々シンジユクゲッターを制圧すると言い出したのだ。

この男の目論見としてクロヴィスにできなかったシンジユク制圧を

成功させることでクロヴィスよりも存在感をアピールしようとしていた。

しかし第1次シンジク制圧はコードナンバー奪還のためやったことを知らないこの男は、「クロヴィスが出来なかった事をこの私が」という思いだけで始めたのだった。

そしてここぞとばかりに反抗勢力が動き出す。

これが後の世の歴史学者、政治学者がブリタニアの貴族教育の闇の部分が出た結果で貴族政治の悪の部分だと口をそろえて言い、軍事学者が政治玄人で軍事素人の蛮行と言った。

最終的には、またもG－1ベースに侵入され、今度は副総督が殺された。

そして後の世はこの2回のシンジク制圧を合わせてシンジク事変と呼んだ。

このシンジク事変でゲットーは比較的復興が進んできていたがここごとく破壊されることとなった。

作戦終結後すぐに純血派により敵のG－1ベース侵入と副総督の被害が発表され、エリア11のみならず帝国全体で物々しい雰囲気になった。

しかし、状況が一変した。

数日後に純血派筆頭のジェレミア・ゴットバルト辺境伯により犯人が捕縛されたとの報が入る。

その者の名は枢木スザク。

特派のKMFランスロットのデヴァイサーでありながら第2次シンジユク制圧では歩兵として出撃していた。

元々特派は第2皇子シュナイゼルの傘下で各総督、指揮官が使いにくいというのがあり、なかなか作戦に参加させてもらえなかった。

第1次シンジユク制圧で参加させてもらえたのはセシルが作戦の本当の狙いを見事に当てそれをもとにバトラーに根回し、もとい脅迫じみた事をしたからであつた。

なので、今回も言うに及ばず参加できなく今回は後方待機もさせてもらえず、研究にいそしんでいた。

しかし、特派のメンバーの心は同じだった。

「枢木スザクは犯人じゃない！」

純血派は純粋なブリタニア人だけで軍を編成しようという思想の派閥だ。

だから、元ナンバーズであるスザクを犯人として捕まえ純血派の思想を広げようとしていた。

そして、枢木スザクの護送中にゼロと名乗る者とその仲間が枢木スザクを強奪そしてマスコミの前で犯行声明が出された。

【枢木スザクは犯人ではない。私こそが真の犯人副総督を殺したの

だ。」

そしてこれが枢木スザク強奪事件、またはオレンジ事件と呼ばれることとなる。

これがこれから起こる変革の始まりだった。

In 帝都ペンドラゴン 皇帝執務室

「……………というのがEU構成本国とアフリカの状況です。」

ライは今皇帝にEUの偵察の結果を伝え終わった。

「わかった。続きは他のものに任せよう。少し本国に滞在の後またエリア11に戻ってもらう。」

「Yes, Your Majesty.」

ライが本国の家に帰りテレビをつけると河口湖の様子が映し出されていた。

そこでは黒の騎士団と名乗るテロリストが放送をジャックしリーダーのゼロと名乗る者が演説をしていた。

『撃っていいのは撃たれる覚悟のある奴だけだ。』

小説家レイモンド・チャンドラが生み出したハードボイルド小説の

主人公フィリップ・マローウが言っていたセリフだ。

「大いなる眠りのセリフか・・・。」

そうつぶやくとライはテレビを消して自分の部屋に戻った。

次の日ライはエリア11に戻る飛行機の搭乗手続きを行っていた。

T e r g e t 2 5 . (後書き)

いかがでしたか

すいませんレイモンド・チャンドラの小説読んだことありません。
ですがどうしても入れたかったものです。

そして、感想、批判何でもいいので反応をください。

お願いします。

Target 26. (前書き)

アンケートが後書きにあります。

答えて下さい。

お願いします。

本当にお願いします。

T e r g e t 2 6 .

ライはエリア11の空港にいた。

河口湖コンベンションセンター占拠事件があった事もあり空港は本国以上に嚴重だった。

いつもは軍用機での移動だがこの日たまたまエリア11に行く飛行機が無かった事もあり民間機で行くことになってしまった。

手続きも全て終わり空港から用意されていたバイクで一端自宅に行くとして正装して総督府まで車で行った。

玄関で待っていたダールトン将軍に連れられて総督執務室まで行く。

「失礼します。姫様来ました。」

「うむ、入れ。」

「失礼いたします。」

「貴様がライか。」

「はい、コーネリア総督。神聖ブリタニア帝国第12皇子ライオネル・ヴィ・ブリタニアに御座します。ある事情から皇位継承権はございません。よろしくお願いいたします。早速本題に入ってもよろしいでしょうか？」

「ほお、聞こうか。」

「まず、日本解放戦線ですが、先の河口湖の事件から内部が分裂している模様です。どうやらバックの組織が日本解放戦線から黒の騎士団へのシフトする動きがあるようです。現状では奇跡の藤堂以下四聖剣以外の戦力はゴミとっていいでしょう。」

「ここが日本解放戦線をつぶす好機だということか……。」

「はい。そこで藤堂を捕まえれば、一気にエリア11平定まで近づきましょう。」

「後は黒の騎士団か。」

「黒の騎士団ですが、どうやら第1次シンジユク事件の首謀者と同人物かと思っています。クロヴィス殿下暗殺未遂、先の第4皇子殺害そしてユーフェミア副総督殺害未遂等考えるとゼロの目的はエリア11の奪還ではなくブリタニア皇族への恨みをもつものではないでしょうか？」

「なぜそう考える。」

「ユーフェミア副総督やクロヴィス殿下の証言そして、状況証拠を合わせた結果です。」

「そうかわかった。後、貴様に依頼したい事がある。」

「は！何なりと任務を遂行して見せましょう。」

「内容は鹿児島のある人物の捕縛または殺害だ。詳細は後ほど紙面にて送るが、これまでに一人に対して1個師団が壊滅している気

をつけろよ。」

「Yes , Your Highness .」

そういうとライは執務室から出て行った。

ライが出て行ってから少し経つとコーネリアとギルフォードそしてダールトンは自然とライの話になる。

「宜しかったので」

「出所が知れないとはいえ一応は皇族、皇帝陛下の息子となっている。それに知らないか空白の12皇子の事を・・・。」

「それは聞いたことがあります。」

今までコーネリアとダールトンの話を聞いていたギルフォードが口をあけた。

「今は亡きマリアンヌ皇妃の御子息であるルーシュ殿下には生まれて間もなく死別された弟君がいらっしゃったと・・・。」

「それが通説だな。しかし一般に知られていない皇族での仕来りがあるのだ。それが『呪われし双子皇子』なのだ。」

「双子皇子ですか？」

「そう、双子の皇子が生まれると帝国に厄災が訪れる。だから、双子の皇子が生まれると貴族か皇族の関係者に養子に出すか、殺すか・・・。」

「殺す・・・。」

「まあ、それは置いておいてどことなく似ている気がせんか、マリアンヌさまとルルーシュに・・・。」

「そうですね・・・。」

任務

反抗しているテロリストの捕縛または殺害。

場所…鹿児島

山の中なので視界が十分に確保できないうえに地の利が向こう側にある。

対象…サムライマスター

複数人いたとの証言もあるが不明。

これまでの被害…1個師団

全員が鋭利な刃物で斬殺されていた。

Target 26. (後書き)

ちよつとライに強化を・・・。

感想や批判本当にお願ひします。

後アンケートです。

1) 恋愛要素はこの作品に入れた方がいいと思いますか？

？入れた方がいい。

？入れなくていい。

？そんな事よりもっと作品のクオリティ上げろ！
です。

？の場合はこのヒロインの名前かオリキャラか選んでいただけると
幸いです。

2) ライはアッシュフォード学園に入るか入らないか。

？はいった方がいい。

？はいらなくていい。
です。

これの結果で最終話までのストーリーが変化します。
本当に、本当によろしくお願ひします。

Target 27.

In 鹿児島

ライは窮地に立っている。

一人の日本刀を持った初老のナンバーズによって……。

「ちっ、こいつもブリタニアの騎士じゃなくてブリタニアの軍人かよ。つまらん。」

数時間前……

音を立てない様に山を歩く

敵に気がつかれない様に

悟られない様に

しかし人が感じないものでも動物は感じる事ができる。

あるものは匂いで、またあるものは温度で、音でそしてその動物の異変を感じる人物がいる。

“敵は気がついていない” そう思うしかし違う “気づかれている事に気づいてない”

気がついたときにはもう遅い……

「お前誰だ。」

後ろをとられた！

「またブリタニアの騎士とやらか？」

「そうだと言ったら……。」

「くそっ！ またかよ。そろそろ諦めてくれねーか？」

「上からの命令だ。貴様を捕縛または殺害との事だ。」

「間違ってもこっちが年上だぞ。ちったー敬意を払え。ってまあ、そんな事はどうでもいい。お前は少しはやれるんだろうな。この前のは張り合いがなかったからな。俺を楽しませろ！」

そういうと初老の剣士は腰にささっている剣に手をかける。

「日本の剣士は着物に袴で戦うと聞いたが違ったのか？」

「鹿児島、薩摩の示現流は『生活に根付いた実践性』を重視している。だから俺みたいに洋服でもいいってもんだ。」

「それでは、貴様を捕縛させてもらう。」

「捕縛か……。それじゃあ俺は捕まえられないぜ。」

「言っている、すぐに前言撤回させてやる。」

そう言うのと両者は各々の武器を構えた。

剣士は腰の刀を抜き蜻蛉と呼ばれる体制にライは銃とナイフを構える。

両者は動かない、いや動けない。

少しの間両者がにらみ合う。

ライも剣士も1秒が何十分にも感じる。

先に動きを見せたのは剣士だった。

ライも反応したが一瞬遅い。

人間の反応速度は一般人で0, 2秒いくら早くても0, 15秒は越せなく越せても認識が遅れる。

0, 15秒、認識そして反応最高でもそれを、越すことはできない。反撃するが、致命的なダメージとまではいかないがかなりのダメージをおってしまった。

「ちっ、こいつもブリタニアの騎士じゃなくてブリタニアの軍人だよ。つまらん。」

また、銃を撃つ、しかし剣士はものともしないで向かってくる。

「坊主、日本の諺になあ、『肉を切らして骨を断つ』ってのが、あるんだ。わかるか？」

剣士はいきなりライに話しかけてきた。

「一応はわかりますよ。」

「実践するとさっきみたいになる。銃弾が当たっても我慢し相手にダメージを与える。」

「そうですか。後はなんかありますか？」

ライが皮肉を込めつつそう言うと剣士は

「お前さんのやつは技術スキルであって芸術アートじゃあねえんだよな。つまり軍人ソルジャーであって騎士ナイトじゃない。お前のは、個々の技術は高いが接続性がない。しかし本来武術は連続性があり芸術的なものだ。芸術性そして実践性を併せ持ったのが武術だ。お前は筋がいい体もまあまあだ。剣術とかの接近戦を鍛えろ。そうすれば必ず強くなる。出直せ。そして強くなれ。そうすればまた相手してやる。」

そう言うとなりが限界かと思切ったかのように歩いて行く。

ライは最後の力を振り絞り声を出した。

「名前を教えろ！俺はライだ。」

「俺は北見だ、北見五百住きたみいおずみ。覚えておけ。」

「覚えたぞ！」

そう言うのと回収要請システムのボタンを押し気絶した。

Target 27. (後書き)

JOO様コードギアス大好き様匿名希望様アンケート回答ありがとうございました。

アンケートはまだまだ受付中です。

あんまりみんなに見られたくない人は感想からだけではなくメッセージからでもOKです。

どんどんお願いします。

次の話の投稿したらアンケートは締め切らせてもらいます。

T e r g e t 2 8 .
(前書き)

お待たせしました。

Target 28.

回収されたライは瀕死の状態だった。

回収されたライの敗北はクーガーやジュンに伝わりコーネリアに伝わり皇帝に伝わった。

目を覚ますのに1週間かかり、動けるようになるまでまた1週間かった。

“奇跡の回復”これはライを担当した医者と言った言葉だ。

話は変わるがこの1週間で大きな出来事が起きた。

コーネリア総督軍およびエリア11駐在の東アジア方面軍による旧日本軍の生き残りの組織、日本解放戦線の本拠地ナリタの総攻撃。

ナリタの攻撃はライが回収された翌々日に行われた。

作戦は順調“だった”、黒の騎士団が出張るまでは。

それは突然起こる。

“ドーン”という物凄い音とともに地滑りが発生した。

それにより作戦に参加していた軍の2／3が行方不明または行動不能に陥る。

作戦本部である先に就任したユーフェミア副総督が搭乗しているG

—1ベースに生き残りの軍や後方部隊そして行動不能になった騎体からの通信が過剰に発生し混乱をきたした。

そこにある一方が入る。

「コーネリア総督の騎体が孤立しています！」

それを狙っていたかのように黒の騎士団上からが接近し下からは日本解放戦線の生き残りと思われる騎体が接近していた。

In 特派トラック

「セシルさんここ見てください！」

スザクに指摘されたところを見たセシルが声をあげる。

「これは・・・総督の騎体が孤立している！？」

それを聞いたロイド、ジュン、クーガーが来た。

「すぐにKMF発進させるぞ！」

「でも許可なしに・・・。」

「俺たち2人はライの権限で出られるが、特派は違うからな・・・。
副総督にでも聞いてみる。それじゃ俺たちは出撃だ！行くぞ、ジュン。」

「はい！」

そう言うのと2人は特派トラックに横付けされている2台のトラックにそれぞれ向かった。

少し経つと2騎の特別仕様のKMFが出ていった。

クーガーとジュンのKMFが山の中腹にさしかかった辺りでランスロットが追いつく。

「クーガーさん、ジュンさんお待ちしました。」

「おう、枢木の坊主やつと来たか。それでどうする。この辺りだとこの土砂を突っ切った方が早いが俺たちにそんな武装はない。」

「僕にやらせてください！僕とランスロットならやれます。」

「わかった。やって見せろ！いいな、ジュン。」

「了解！期待してるわよ。枢木君！」

そう言うのとジュンとクーガーの騎体はランスロットの後ろに待機した。

「行きます！」という枢木の声がスピーカーから聞こえるとランスロットが専用の武器ヴァリスを構える。

一瞬の静寂があったと思うと、次の瞬間ヴァリスから弾薬が発射され物凄い勢いで土砂がなぎ倒されていく。

一瞬圧倒されていると枢木から

「行きましょう！僕の後についてきてください。」

という通信が来た。

「「急ごう！」」

そう絶妙なタイミングで2人から同じ返答が来た。

ランスロットがヴァリスを発射しながら進むとそこではコーネリア
総督のKMFグロースターが無頼と見たこともない2騎のKMFに
囲まれていた。

1騎は紅く片腕が異様なものとしてもう1騎は緑色で一つ目な刀の
よなものをもったKMFだった。

T e r g e t 2 8 . (後書き)

アンケートを回答してくださった方ありがとうございます。
恋愛要素は入れないようにします。

アッシュフォード学園は時期は未定ですが入学します。
他にご意見感想ありましたら遠慮なくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7522/>

コードギアス～black knight of the fascination～

2011年12月1日17時53分発行